

時代の転換のただ中で、「50年」を振り返る

60年安保ブンド結成50周年記念集会

08年12月21日

新左翼創成の源流にみる「相剋の歴史」とブント結成の意味
六〇年安保ブント結成五〇周年記念 1

藏田計成

年表 戦後学生運動と新左翼創成の軌跡 41
その源流から六〇年安保まで

藏田計成

年表 反戦学同／社学同 59

作成 藏田計成
協力 中村光男

発行 情況出版株式会社

時代の転換のただ中で、「50年」を振り返る

60年安保ブンド結成50周年記念集会

08年12月21日

新左翼創成の源流にみる「相剋の歴史」と ブント結成の意味

藏田計成

はじめに

- 1 全学連結成VS日本共産党(層としての学生運動論と青共直轄路線)
 - 2 一九五五年体制の確立、奇跡の復活と砂川闘争の勝利
 - 3 平和共存、平和擁護闘争と原水爆実験反対闘争
 - 4 スターリン批判と、日本トロツキズム運動の台頭
 - 5 トロツキズムの思想的、理論的、政治的役割と影響の度合い
 - 6 別党コースⅡ学連新党結成への道
- ◆補追1 革共同第一次分裂と革共同全学連・成立と瓦解
 - ◆補追2 建党組織論にみるブント主義と革共同主義
 - ◆補追3 全学連妥協人事を可能にした諸条件
 - ◆補追4 革共同全学連実現の諸条件と瓦解要因
- 引用・参考文献目録一覧

化が生じたのでした。「新左翼」とは、既成左翼に代わる、新しい左翼を総称するようになったのでした。

この和製メディア用語によって、「新左翼」と他称されることを強いられた、その当事者たちは、私自身も含めて、没階級の思想的政治的潮流として他称されることを忌避したのでした。そして自らを「革命的左翼」と言語規定して、決して、己を「新左翼」とは自称しませんでした。

その後、六〇年代半ばには、広松渉などが「新左翼」という表現を用いるようになりました。それをきつかけにして、いつの間にか自称用語として、「新左翼」という表現は、市民権を得たようです。以上のような歴史上の経過を経てから、半世紀近く経ったわけで、本稿においても、その通例に従うことにしました。

運動史的にみれば、日本新左翼運動の社会的登場は、六〇年「一・一六羽田闘争」といえます。

この六〇年安保・羽田闘争については、当時、国内のメディアだけが大きく報道しただけではありませんでした。外電によつて、「ゼンガクレン」の名は全世界の津々を駆けめぐったのでした。ソ連「プラウダ」が「岸はカモシカよりもすばやく逃げた。それは羽田における愛国者の闘いのためであった」と報じたのは、ほんの一例に過ぎません。羽田闘争は衝撃的な闘争として「赤いカミナリ族」「ヌーベルバーグ」として、話題を集めたのでした。おそらく「スターリン批判」以後の国際共産主義運動が漂流するなかで、既成の左翼、既成の政治党派にはないよう

はじめに

「新左翼」という政治的潮流が、社会的登場を果たしたのは、一九六〇年安保闘争期にさかのぼります。詳しくいえば、ヨーロッパ・イギリス「ニューレフト・レビュー」誌の創刊にみるところの、新左翼の呼称が、そのはじまりとされています。その通説にしたがえば、「新左翼」とはマルクス・レーニン(共産主義者)党以外の、新しい政治的潮流を指していました。思想が世界を引き受けることを期待して、実存主義やのちに登場する構造主義等の非・脱マルクス主義思想に未来を求めた時代とも、十全に重なります。

ところが、その「新左翼」という呼称が、メディアの用語として日本に持ち込まれるようになると、その呼称の意味内容に変な、新しい時代に向けた社会的異質性を予感させる「政治的潮流」としてインパクトを与えたものと思われまます。

当時のヨーロッパでは、ユーロ・コミュニズムが既成左翼として存在していました。その中には、三〇年代に結成された異端のユーロ・トロツキズムⅡ「第四インター」も、一角を占めていました。

ところが、反日共系学生運動Ⅱブント全学連は、日本においては過去の階級闘争史上に存在したことがない、そのトロツキズムをも批判的に止揚して、政治的再生をかちとるべく、劇的な登場をなし得たわけです。この一点が物語る事実において、新しい政治的潮流としての存在価値を誇示できたのではないかと思います。

いずれにせよ、新左翼創成の歴史的意味を明らかにするためには、その実践的な自己形成過程を、創成の源流にさかのぼって解明しなければいけません。その際に考慮しなければいけないことは、創成の源流をどこに設定するのか、ということでは、「新左翼」という呼称の対象となった運動実体としての新左翼運動の創成に関して、その起筆はどこまでさかのぼるべきでしょうか。最終的には個人の歴史観に係わることでありますが、おそらく、時系列的には五〇年代後期の「一九五五年体制」が妥当ではないかと思えます。

その主な理由と根拠は、新左翼創成という歴史事象が、五五年体制確立期におけるそれと、きわめて逆説的な相関関係にあ

るからです。

保守合同、社会党統一をはじめとして、日本共産党「六全協」による議会主義政党への右旋回、産別型労働運動から、総評民同型労働運動（集团的圧力⇨春闘型労働運動）への変質に象徴されるように、五五年体制確立という、保守・革新の共通言語によってくることができると戦後政治史の大転換期の中にこそ、「アンチテーゼ」としての新左翼⇨革命的左翼の歴史的、論理的創成の「逆説的根拠」を求めることが可能だからです。

さらに、論考をもう一步進めて、新左翼登場を、「学連新党（フント結成）」としての「真の前衛党創成」という主題の側から考察していくと、その歴史記述はもう一区切りさかのぼることになります。結局は、記述の対象年代は、日本共産党「五〇年分裂」の先駆けの一つであり、厳しい政治的対決の前史ともなった、四八年「全学連結成」にまで遡及することが必要となります。

以上のような理由で、新左翼創成の歴史の意味を、対既成左翼、対既成前衛党との「相剋の始源」にさかのぼってみていくには、全学連結成を嚆矢とした最初の対立時点にさかのぼって起筆するのが妥当ではないかと思えます。

1 全学連結成VS日本共産党

戦勝帝国主義⇨GHQによる対日占領政策は、占領⇨半植民地的従属化⇨同盟国化をめざして、いくつかの転回点をみせています。

地的ファッショ的支配反対、民主主義・学問の自由を守れ、授業料・運賃値上反対、学生生活の破壊反対」の二本柱でした。

この全学連結成によって、戦後学生運動は階級闘争の一翼をなす固有の社会的勢力としての第一歩を印したのでした。しかし、この全学連結成については、誰もが新左翼創成を予見しなかったとはいえず、以下のような歴史の事実を重ね合わせてみると、源流として「始端の一滴」と考えても決してははずれではないと思えます。

その理由は、この全学連結成と学生運動の展開過程の中にこそ、その後の、小ブル急進主義を主体としたこの新左翼⇨革命的左翼創成を必然化させるような主体的要因が伏在しており、運動組織論上の遡源となるような物質的諸条件が厳存していた、という事実に在ります。とくに、初期の闘争の対象が、自国の支配階級とその背後に在る対占領軍との対決という民族主義的要素を帯びていたとするならば、小ブル急進主義が登場する有力な根拠にもなります。しかも、後にみるように古典的論理に基礎をおく既成左翼、既成前衛党との、学生運動論や運動路線をからめた対立を必然化させた要因をめぐり、相剋の歴史経過は、新左翼創成にとっては重要な意味をもっていたからです。

その典型例が、学生運動を展開していく際に生じた、運動組織論上の決定的な違いです。

全学連結成当時における日本共産党中央の学生運動論の基底

① ファシズム・軍国主義解体、民主化政策。② ニーレスト禁圧、民衆弾圧。③ 資本主義再興・朝鮮戦争下の反共反革命・軍事的強権支配。④ 単独講和戦と日米安保体制敷設、という経過をたどっています。

戦後学生運動は、戦後階級闘争がこのような占領政策をめぐる攻防を展開するなかで、その一翼を担う社会的勢力として、独自の闘争を展開しました。

最初の高揚は、全官公自治連（全国官公立大学高専学生自治会連盟）主催、四八年「六・二六教育防衛復興全国ゼネスト」でした。全国一四校二〇万名が参加した、史上初の全国ゼネストの特徴点は四点に要約できます。

- 1、学生運動史上初の全国総決起闘争であったこと。
- 2、戦後三年間にわたる学生運動の帰結点であったこと。
- 3、戦後学生運動の飛躍的前進を切り開く最初の転換点であったこと。
- 4、非戦平和主義、学問の自由、生活防衛、植民地的強権支配反対を掲げたこと。

このゼネスト成功を背景にして、四八年、全学連（全日本学生自治会総連合）結成大会が開催されました。参加校一四八校、参加人員二五〇名でした（半年後には二六六校、加盟人員三万名。主なスローガン…「教育制度民主化に名を借りた教育の植民

部を構成する「学生階層規定」をみるかぎり、後にイデオロギー的批判の対象となつた「機械的唯物論」を色濃く投影させていました。党中央指導部は、いわば「プロレタリア本体革命論」を教条主義的に適応し、生産手段をもたない労働者と、小土地所有農民は「異質な階級」、「貧農は無秩序的ルンプロ」、「学生は中間階級」と決めつけて、自己の固定観念に固執しました。

「インテリゲンチヤは、生活的にブルジョアジーに寄生する根無し草の雑階級であるから、常に小ブル性による動揺をくり返す本質的に反動的なものであり、特殊的・部分的に革命的人間が出るが、これも常に小ブル性を身につけているから、徹底的に実践のなかに鍛え直さなければ使いものにならない」（志田党政治局長）。

このような日共中央の「学生階層規定」に対して、全学連党員グループは「層としての学生運動論を対置しました。学生階層を、相対的には独自の政治的社会的要求をもつた一つの社会的階層としてとらえ、その潜在的行動力、エネルギー、知的能力などの特性をくみ上げ、「層として」結集し、階級闘争の一翼に位置付けたわけです。

戦術形態に関しても、特定の政治課題に向けて大衆闘争を組織し、授業放棄、同盟休校、ストライキ、街頭デモを展開しました。闘争形態に関しても、全国統一組織による、全国統一行動、ゼネストをめざしたのでした。

これに対する党中央の批判は、説得力を欠いたものでした。

「学生運動は相変わらず、学生大会、ストライキの戦術を一步も出ない孤立闘争が行われている。…全学生運動における根本的欠カンは党基本的組織における学生運動、教育防衛闘争の政治的無理解（ストライキマン的傾向）と…学生党的政策と戦術に現れている。…学生細胞を全学連グループに解消する傾向…反党的になったり…精鋭分子だけの組織になっている現状もある」（日本共産党学生運動の当面の緊急課題）。

もう一つの対立点は、戦術方針上の対立でした。

四七年共産党第六回大会は「人民政権をめざす地域人民闘争」「地域権力の左旋回」等を策定しました。そのための「復興闘争テーゼ」として、「地方権力」「職場権力」「地域権力」「学校権力」等を提起。さらに「中央権力」を下から麻痺させて孤立させる「串刺し論」として「大学防衛綱領」「対学校権力闘争論」を打ち出したのです。その上で、全学連の戦術方針に対しては、

「全国闘争のみを考えて、地域闘争・人民闘争戦術を理解せず…極左トロツキスト的戦術」（党青対部員御田秀二）をとっている、と批判したのです。

しかも、その党の方針・路線・戦術を、党組織とは区別すべき大衆組織Ⅱ全学連による学生運動に、そのまま持ち込もうとしたために、両者間の対立は不可避となり、埋めがたい溝を作ることになりました。結局、この対立が、来るべき宿命的対決の序曲となったわけです。

このような両者の対立のはざまにあつて、全学連運動と表裏

一体の役割を果たした学生組織が、反戦学同（日本反戦学生同盟、通称A・G・アージー、仏語Anti-Quatre アンチ・ゲール）であつたという事実も、両者間に存在した宿命的な対決を象徴しています。

戦後青年学生運動に関する日共中央の組織方針は、青年学生組織を党の指導下におくという直轄方式でした。すなわち、全学連結成以前には、四五年、党の指導下に、いち早く「青共」（青年共産同盟）を結成したのでした。全学連結成以後は、四九年、「民青」（民主青年同盟）への改組を試み、全学連結成以後は、四八年「民学同」（民主主義学生同盟）、四九年、「民青」（民主青年同盟）への改組を試み、全学連「層」としての学生運動」とは別個に青年学生運動の独自組織を対置して、大衆闘争への影響力を行使しようと考えました。

これに対して、全学連学生党員グループは、レッドバジ阻止闘争を勝利的に展開するなかで、全学連運動を構造的に強化する必要に迫られたのでした。そのために、日共「五〇年分裂」を契機に学生運動を側面から支える独自組織Ⅱ反戦学同を結成することにしました。党反主流派Ⅱ国際派のもとで開催された全学連第四回臨時大会は「帝国主義を打倒し祖国を抑圧と隷属から解放するための闘争」を宣言するとともに、反戦学生同盟の組織方針を決議したのでした。

翌五一年、最初の反戦学同全国協議会が、全国六〇校、二二〇名参加、三日間にわたり開催されました。「全学連大会を禁圧した帝国主義者の銃剣による威嚇の下で開かれた。各校代

表は官憲の尾行と追及をさげ乍ら一日毎に変わる会場に参集した」（反戦学同機関誌「反戦旗」五一・六）。

このように最初の反戦学同のスタートとは、「五〇年分裂」直後の、共産党中央との厳しい党内闘争と、迫り来る事態が風雲急を告げる緊迫した政治情勢の下で開催されました。以下の引用によつて、その概況をすることができると思います。

「日本反戦学同は、五〇年朝鮮戦争のさなかに、日本学生の反帝闘争を強固に支え、その活動的部分をより高度に教育するため、平和擁護闘争を中心課題として結成され、五〇年、五一年の闘争において非常に大きな役割を果たした。」（同盟機関誌「反戦旗情報」五八・四）

「反戦学同の任務は、全学連を中心とした学生運動を一つの力に結集して、統一行動と統一戦線の拡大のために闘うこと、…自治会組織を強化し、影響を与え、クラス委員、サークル活動等に積極的に参加し、…平和と独立の方向に発展させること」（反戦学同第一回全国大会報告）

「真の平和、恒久平和を確立するということは、正しい理論に導かれた粘り強い闘いを必要とする。世の情勢を科学的に分析し、その中から、われわれに科せられた任務をひきだし、自治委員会、その他の民主団体と協力して、恒久平和をめざす社会運動たる学生運動を正しい路線に乗せ、強化する役割をもっているのが、わが同盟である。すなわち、正しい学生運動の発展のために政策方針の大胆な提起者であり、運動の指導点検を

する組織者であり、運動の正しい総括者でなければいけない」（反戦学同・同志社大支部「私たちの闘い」五八年）

なお、この最後の引用には、特徴的なことが一つあります。当時の大会議案書はほとんど過去の「総括」↓現在の「情勢分析」↓当面の「任務と方針」の三部構成という論理の展開形式をとっていたのですが、その三部構成について説明的にふれている点です。

反戦学同組織は、自治会執行部に足場をもたない自治会Ⅱ全学連の少数派活動家にとつて、有効な活動の場所を提供すると共に、「全学連Ⅱ反戦学同」を枢軸として、戦後学生運動の歴史を切り開きました。そこにおいて果たした歴史的役割は、きわめて貴重な存在価値でした。

別言すれば、階級闘争は、対権力との熾烈な闘争過程において、往々にして運動内部に左・右・中間の三極構造を生み出し、その政治的実践に媒介されながら、内部に派生する矛盾を止揚するという、重い課題を背負いつつ前進せざるを得ません。その視点から戦後・創成期学生運動をとらえ返してみれば、共産党中央の闘争指導の対極に、全学連Ⅱ反戦学同を枢軸とした先進的学生運動を対置したことは、歴史的必然でした。反戦学同は、その歴史的役割を一貫して、担い、革命的左翼創成の歴史的前提をなしたといえます。

また、学生党員グループは、歴史変革につながる戦略路線、闘争形態を必死に模索し、極限的に追求した結果、党中央との

対立を深めることになりました。かくも早い時点において、運動内部に非和解的な対立を根をさせていたわけです。

このような、戦後階級闘争のなかで繰り返された真実をめぐる争奪戦は、決して解消することはありませんでした。初発の対立はそのまま、最終的訣別へ向う序曲となり、吊鐘になってしまいました。結局は、学生党员グループが刻んだ非妥協的な闘いの歴史は、無謬性を自認・豪語してきた前衛党との相剋の歴史に他ならなかったわけです。

いま、あらためて創成期の歴史を振り返ってみる、その事実が鮮明になるばかりです。

例えば、全学連結成から日共六全協までは七年間の歳月が経過しています。この間、全学連VS党中央との対立が表面化しない期間は、国際派全学連が瓦解して、組み手がいなくなった「三年間」に過ぎません。それは所感派⇨全学連時代のわずか「三年間」です。

ところが、その「三年間」さえも、決して無風状態ではありませんでした。「日共五〇年分裂」⇨「国際派全学連の瓦解」のあとを引き継いで、反戦学同VS党中央という、新しい対立軸に原点移動しただけです。この時代を加算すればから、無風期間は「ゼロ年」ということになりません。

「反戦学同は一貫してスジを通したし、一度も思想的に武装解除したり、組織を解体したことはありません(初代表山中明)とあるように、不滅の足跡を残しています。

場です。革命の手段とその根拠を、賃労働と資本の基本矛盾、搾取による絶対的窮乏化論、生産力と生産関係の矛盾のなかに革命の必然的根拠を求める「プロレタリア階級本体論」の教条的適用を意味します。にもかかわらず、現実の歴史過程をみれば歴然ではないでしょうか。二〇世紀後半の国際共産主義運動を主導したのは、第二次帝国主義戦争終了と同時に本格化した「植民地独立闘争」「植民地革命戦争」であり、非抑圧民族・人民でした。明らかに、革命の主体はプロレタリア概念の埒外でした。そのなかで小ブル急進主義は、十分な補完的存在であり得たわけです。

(2)五〇年代後半から、資本主義体制と社会主義体制を基本矛盾とする「体制間矛盾論」が、五〇年代のコミンテルン型一國社会主義論の延長線上に提起されました。ところが、国際共産主義運動の重要な一翼を担うべき本國階級闘争におけるプロレタリアートは、「公益主義」「民族主義」「民益主義」を止揚し得ないどころか、プロレタリア国際主義の対極ともいえる「体制内化」の一途をたどることになり、歴史的階級としての存在価値を喪失したというべきではないでしょうか。歴史の担い手でありながら、自己の歴史、自己の哲学を実現し得ていないといふべきです。この階級的自己実現の欠落を補完するかたちで浮上したのが、学生運動でした。小ブル急進主義の台頭は、根源的矛盾を止揚するための警鐘と思いきや、日共中央は「プロレタリア本体革命論」の立場から、小ブル急進主義批判を「極左トロ

その事実を含めて、「全学連結成」の四八年から、「ブント結成」の五八年に至るまでの一〇年間の歴史過程は、歴史のある不確かな予見事象が、歴史のある確かな必然事象へと、ある磁場に向って確実に転回していった過程といういい方も可能です。より具体的には、その歴史過程は、戦後階級闘争における綱領路線や戦術形態をめぐる矛盾の止揚を経るなかで生じた疑念が、真の前衛党創成という確実性へと収斂する志向過程といえ換えることができます。

いずれにせよ、日共学生党员グループは、最も誠実に正義と思想の深さをという普遍性の獲得を求めたがゆえにこそ、新左翼創成の歴史を象徴するような、過重な試練を強いられたのでした。これは、疑いもなく「歴史のパラドックス」といえるでしょう。以下、四点を補記します(なお、この項の叙述の範囲は「全学連」「反戦学同」をとりまく概説にとめおくことにし、詳しい歴史叙述は、別稿において展開するつもりです)。

(1)歴史を先読みすることは不可能にちかいかいといえ、いまみてきたように、歴史を結果的に跡付けてみると、戦後学生運動内において派生した対立・抗争の中に、新左翼創成の歴史の必然性の根拠を見出すことは容易です。例えば、先にみたような、日共版「インテリ⇨小ブル規定論」が示す教条は、本質的な意味をもっています。この教条主義的論理は、生産手段をもたないプロレタリアートこそが革命的階級であり、農民や学生は小ブルジョア⇨中間階級であり、革命の主体ではないという立

ツキズム批判」に仮託して断罪したのでした。

(3)当時の時代状況に対する歴史の評価を別な文脈で表現すれば、暗闘の歴史は明らかに「歴史の戯れ」と表現しても不具合ではないかもしれません。日共五〇年分裂は、コミンフォルム批判という外在的要因によって党の分裂を誘発させてしまいました。しかも、この分裂は国際共産主義運動の生きた現実を直接反映したものとはいえず、必ずしも、日本の現実の階級闘争や学生運動に直接媒介されたものではありませんでした。党の路線をめぐる綱領・戦略論争という、いわば、コミンフォルムの「ご宣託」というにも等しい「綱領主義的領域」「実践外的領域」においてもたらされた結果事象です。そのために結局は、この対立は実践的に止揚されるための十分な機会を与えられないうまま、先送りされ、マグマとして内攻せざるを得ませんでした。その代償は高過ぎたといえます。後の時代に膨大なエネロスを実現するという「痛苦的負債」を遺してしまつたからです。新左翼創成は、その負債を引き受けながら道を切り開く他はありませんでした。

(4)五〇年コミンフォルム(欧州共産党・労働者党情報局)による、「占領下平和革命論批判をきつかけにして始まつたのが、「日共五〇年分裂」でした。既述しましたが、その後、所感派と国際派の対立と抗争、国際派全学連の瓦解に代わる、所感派全学連が登場するなかで、対立の軸は「反戦学同VS党中央」へと原点移動したに過ぎません。対立の接点は反戦学同と所感派全学

連との角逐でした。にもかかわらず、先進的學生運動の火は、決して絶えることはなく、反戦学同活動家の闘いは、九州、中国、関西、関東、首都圏など、全国各地の単位自治会において展開されました。全学連大会にも代議員として出席し、論争を挑み、運動を継続したのでした。そのような時代を象徴する出来事の一つが、五二年、反戦学同同盟員一二名に対する「テロ・リンチ・監禁事件」でした。「帝国主義のスパイ」であることを自白し、自己批判せよ! とばかり、三日間にわたって集団暴力が加えられたのでした。新左翼創成期は、このような試練をかくぐりながら、自らの歴史を紡いだのでした。

2 一九五五年体制の確立、奇跡の復活と砂川闘争の勝利

以下の年表事項によって、五〇年代の国際・国内情勢の推移を概括しましょう。

◇国際政治動向

五三年

・朝鮮戦争休戦協定調印。スターリンの死。徳田球一、北京で客死。

・インドシナ戦争休戦協定を境にして世界大戦の危機は回避された。

・アジア・アフリカ平和一〇原則。(バンドン会議)。

・ソ連共産党第二〇回党大会フルシチョフ秘密報告「スターリ

ン批判」平和共存路線。

・ポーランド事件、ハンガリー事件・ソ連軍介入にみる東欧社会主義国の矛盾の露呈。

・エジプト・ナセル、スエズ運河国有化宣言、英仏出兵。

・米英ソ三国、核独占競争をめぐる政治的、軍事的、外交上の駆け引きを展開。

五七年

・平和共存路線をめぐる「中ソ対立」。

◇国内政治動向

・朝鮮戦争休戦後の、新しい情勢変化に対応した防衛力の再編強化。

五三年

・政調会長池田・米國務次官補ロバートソン会談。

五四年

・沖繩軍事基地無期限保有」表明(アイク年頭教書新)、日米関係を軸とした政治的軍事的再編強化。

◇五五年体制確立の実態

七月

・共産党は「六全協」において、五〇年分裂を自己批判、五一年綱領(反米独立・武装闘争路線)を全面的清算。「階級政党」から「国民政党(議会主義政党)へと右転換。

・労働運動は「団体圧力型」春闘路線へと変質、総評第六回大会における高野実から太田岩井への指導部交代、産別型階級的労働運動から、民同型妥協体制路線へと変質。

九月

・平和運動も、社共統一戦線が実現し、「原水協」(原水爆禁止日本協議会)結成。

一〇月

・「社会党統一」の実現。二月衆議院総選挙において左右両派で三分の一議席を獲得、それを背景に統一を実現。

一一月

・「保守合同」の実現。これによって戦後政治を清算し、新たな保守政治体制を確立、鳩山内閣↓石橋内閣↓岸内閣への政権移譲のレールを敷設。

◇学生運動

・日共「六全協」に象徴される階級闘争の雪崩現象は、すでに、五三年朝鮮休戦協定調印時に予兆があった。

・第四回世界青年学生平和友好祭(カレスト)、「日本のうた」え」結成。

五四年

・「全国学生うた」え」結成。

五五年

・「歌おう、踊ろう、話そう会(パーティー)」(東京理大)。「世界民

青团代表歓迎、全京都うたとおどりの会」(二〇〇名)立命館大)。「地上最大の平和と友情ピクニック」(奈良公園)。「世界民青連代表中央歓迎会」(二万数千名、東京体育館(フェスティバル路線の総仕上げ)。

・所感派」全学連第八回大会、悪名高い「七中委イズム、八回大会路線」採択、「日常要求活動重視」「自治会サービス機関論」「トイレに石鹸運動」「平和と友情の歌声運動」「踊ってマルクス、歌ってレーニン」「六全協ノイローゼ」。細胞は解体寸前の「仮死状態」。

年表からもわかりますが、五〇年代の国際・国内政治情勢は、五三年朝鮮戦争休戦、五四年インドシナ戦争休戦、五六年ソ連共産党第二〇回党大会のフルシチョフ「スターリン批判」「平和共存路線」という戦略転換を契機にして、戦後第二の新しい流動局面を迎えることになりました。

敗戦帝国主義」日本資本主義も、終戦一〇年目にして戦後復興・再生から離脱過程へと、新しい発展過程を迎えました。朝鮮特需を経て、「もはや戦後ではない」(五六年経済白書)と喝破する時点にまで復活を遂げ、五四年〜五七年の「神武景気」、五八年〜六一年の「石戸景気」を通過するなかで、戦後復興期から離脱し、高度成長への移行期を迎えました。先の年表「五五年体制確立の実態」の項目にあるように、日本の「五五年体制確立」は、日本独占資本主義復活を物質的基礎にして、戦後政治体制

の転換を実現させました。

他方、全学連学生運動は画期的な再建に成功しました。五七年「国立大学授業料値上げ」が報道されるや、たちまち事態は一変、学生は素早い反応を示し、二年ぶりに大衆の統一行動を成功させました。

東大教養学部二五〇〇名を先頭に全都四〇〇〇名が「国立大授業料値上げ反対、都学生決起大会」に参加、この反対闘争の成功を背景にして、戦後学生運動は四八年全学連結成につぐ、「第二創成期の到来」「第二の全学連結成大会」を実現しました。

「全学連は、また昔のようにアカくなつた」——最近こんな言葉を耳にする（朝日新聞夕刊五六年六・一五）という書き出しではじまった記事は、内容を掘り下げて「特集」するなど、学生運動は注目を集めていました。

五六年、全学連第九回大会には六〇〇名が参加、「奇跡の復活」を遂げ、再建スローガンを採択。「平和と民主主義、より良き学生生活のために」というこの路線は、「七中委イデオログ路線」の否定であり、新しい再建路線「八中委・九大回路線」と称されたものでした。

その復活路線を発展・飛躍させた闘争が、大会直後の「第二次砂川闘争」でした。

全学連三〇〇〇名を先頭に四〇〇〇名の農民、学生、労働者は基地拡張阻止闘争を打ち抜きました。警官二〇〇〇名と激突、負傷者七三〇名、逮捕者一名、警官一名自殺を出しな

がら、農学労は強制測量を素手のスクラムで実力阻止するという、画期的な勝利をおさめたのでした。

この砂川闘争の歴史的勝利の感動も束の間、砂川闘争の総括をめぐり全学連書記局内部において、最初の対立が発生したのでした。

ことの発端は、砂川の勝利直後に行われた、全学連指導部総括会議でした。その席上で、砂川闘争の過程で全学連書記局の留守を担った「残留指導部」は、何の前触れもなく口火を切ったのでした。「砂川闘争は、『極左的ではね上がりで、社会民主主義労働運動幹部の掌中で踊った孫悟空的闘争だ』と放言した」（学連意見書）とあるように、論争点は闘争戦術をめぐっての評価でした。

一方の当事者によれば、「勝利のためには犠牲はやむを得ないという視点から、闘争は成功」という立場と、「無駄な流血や体当たり極左戦術は、誤りであり、闘争は失敗」（森田実、五二年東大入生）という二つの立場であったと指摘しています。この見方に対して、他方の当事者は

「学生運動の力が、闘争勝利の第一の要因とみるのは誤りである。アメリカ対日政策の変化、日本独占資本主義の自立などの戦後政治の転換にみる、国民の中の支持があったからだ……」「われわれとしては『学生が血を流して闘えば闘争を勝利に導くことができる』という思考様式へ傾斜することを戒めるため……学生のやることには限界があることを示すたとえ話として、孫悟空の話を持ち出した」（高野秀夫、五四年早大入生）とも釈明して

いますが、その批判の根底には、「日和見主義はすばらしいんだ」という高野イデオログが底流していた、といえるかも知れません。このように、戦術の先鋭化是非をめぐる論争をきっかけにして、対立は一挙に表面化しました。そればかりか、この対立は、現地闘争指導部を全学連書記局から排除して、書記局残留指導部書記長体制の維持・強化を画策するまでにエスカレートしたのでした。

だが、このクーデター劇は、一時的には成功したのですが、現地闘争指導部が巻き返しをはかり、翌五七年全学連第一〇回中央委員会、反対派を書記局から一掃し、わずか二ヶ月で決着したのでした。

意外にも、党中央はこの全学連内部の論争には「不介入」を装ったのでした。だが、それも止むを得ない対応でした。理由は明白です。全学連は再建されてから半年も経っていません。しかも、全学連再建を行ったのは、党中央指導ではありませんでした。人的配置、オルグ体制など人脈形成はゼロ、党中央が全学連に対する政治的影響力行使するには、日が浅すぎたのでした。そればかりではありません。学連意見書によれば、「党中央は相変わらず砂川闘争勝利後も、全学連中央グループの意見に迎合する態度さみせていた。だが、実際は政治的陰謀が密かに進行していた。……全学連中央グループ内のメンバーを巧妙に排除して、出世主義者や中間派を党中央指導メンバーに加え、学生運動指導部の再編、ポストの新設をしようとしていた。

3 平和共存、平和擁護闘争と原水爆実験反対闘争

全学連は、砂川闘争による高い社会的評価と広がり背景にして、社会的諸階層からは絶大な支持、連帯、期待を集め、各界との「熱い連帯」を共有しました。いまにして思えば想像外の光景ですが、それは唯一最高の「よき時代」を象徴していました。全学連が史上最多動員数と規模を記録したのもこの時期です。英国クリスマス島水爆実験に抗議する五七年「五・一七原子戦争準備反対全日本学生総決起行動デー」を開催しました。全国六三都市、一七〇校、三八〇自治会、三五万名、東京・日比谷野音には、戦後最大、実に二万五千名が参加したのでした。

学生指導部の追及によって、不潔な取引と陰謀が暴露された。例えば、正式な党内諸グループ会議では、党中央指導部は何ら反対意見を述べなかつたばかりか、全学連中央グループに同調する態度さえとつた。だが、下部組織細胞会議ではデマ、中傷、誹謗を行つていた（学連意見書）。

別な証言によれば、党内は六全協直後であり、上から下までてんやわんやの状態であつたために、党主流派の表立つた動きはなかつた（浅田光輝）という見方も有力です。

以上のように、砂川闘争の中で派生した対立は、明確な左右二極分岐という形をとって学生運動の勢力を二分し、両者はせめぎ合いを繰返しつつ、やがて、この対立は綱領路線、戦略論をめぐる論争へと発展したのでした。

来賓挨拶・原水協、砂川反対同盟、沖繩社大党、社会党、共産党宮本顕治、日教組、東京地評、早大教授。

メッセージ… 国際学連、総評、全連、全専売、日高教、国税東京、共同印刷、砂川町長、愛大大学長、教育大教授、明大文学部教授会等。

全学連との統一を控えた夜学連(夜間学部自治会連合)の集会にも、六〇〇名が参加しました。

六月、全学連第一〇大会が開催されました。砂川闘争以来続いている対立に最初の決着をつけることができました。奇跡の再建全学連大会から一年後、砂川闘争勝利から、わずか七ヶ月後でした。大会の特徴は次の三点です。

- 1、反対派が主張する、批判の論理、組み立て、枠組みが初めて大衆的に明らかになったこと。
- 2、主流派Ⅱ多数派、反主流はⅡ少数派、と呼ばれる明確な対立の構図が出来上がったこと。
- 3、執行部提案の「総括、情勢分析、任務と方針」は、「一〇人内外の保留を除いて一票の反対もなく採択された」(高野秀夫)こと。

この第一〇回大会はあつけない結末に終わりました。「誤った意見と行動は、きわめて短時間の間に、息の音は止められた」(学連意見書)とあるように、大会の結末は三大学自治会(教育大四学部自治会、神戸大三学部自治会、早大一学部自治会)の造反にとどまっただけでした。

媒介にしながら綱領・路線論争へとひろがりました。そればかりか、やがては世界共産党・労働者党による「モスクワ宣言」(二ヶ国)、「平和宣言」(六ヶ国)発表、「日共党章草案」発表等とあいまって全面化し、この論争には、あらゆる政治的諸潮流を巻き込むことになりました。以下は、日共党内論争を代表する二派の立場です。

◇党章派の立場

「我が国を基本的に支配しているのはアメリカ帝国主義と、それに従属している日本の独占資本であり、我が国は高度に発達した資本主義国でありながら、アメリカ帝国主義に半ば占領された事実上の従属国である。したがって来るべき革命の性格は独立と民主主義の徹底を中心任務とする社会主義の基礎を切り拓く人民民主主義革命である」(党章草案)。この綱領路線は、アメリカ帝国主義とそれに従属的に同盟している日本独占資本との「二つの敵」に対する、民族の完全独立と民主主義擁護のための「民族民主革命路線」(民族革命路線)であり、当面の革命は人民民主主義革命(独立・民主・平和・中立)として、これを社会主義革命に急速に発展させる「二段階革命論」。

◇構改派の立場

ソ連第二〇回大会を契機にイタリヤ共産党の民主主義・社会主義革命論をモデルにし、「現代マルクス主義」(全五巻五八年)を軸に新マルクス主義潮流として自己形成。社会主義革命をロン

五七年〜五八年、核実験反対闘争は全国各地で展開されました。英国クリスマス島水爆実験反対中央大会、原子戦争準備反対・原水爆実験禁止協定即時無条件締結要求全日本学生総決起デー、原水爆実験禁止国際統一行動デーなど、多彩でした。学生運動内部では、この過程で新たな論争が浮上しました。砂川闘争のときと同じように、「授業放棄か」「ストライキか」「整然デモか」「グザグデモか(ヘビ踊り)」という戦術形態をめぐる論争でした。

「二一」行動デーを前にして、早大細胞高野グループは「ジグザグデモはやらない」という早大一文自治会決定を、わざわざ新聞記者会見まで開いて宣伝し、ブルジョア・ジャーナリズムを動員する手段を弄した」(同)と批判したのですが、ここで指弾された事実、表層の現象に過ぎませんでした。見かけの対立の深部には越え難いミゾが横たわっていたのです。

その非和解的ミゾを暴き出す引き金となったものは、ソ連共産党第二〇回大会でフルシチョフが提起した路線転換でした。この転換は、過去の部分否定を出発点にした新たな戦略提起でありながら、その思惑をはるかに超えるものでした。たんなる路線転換にとどまらず、国際共産主義運動の総路線に係わる根源的な問題を含んでいました。例えば、

「ソ連の水爆独占的保有」「ソ連人工衛星スプートニク第一号打ち上げ成功」「社会主義の優位論(金環地理論)」「日本帝国主義の復活論争」「アルジェリア・エジプト植民地解放闘争」などを

グリボリューション、漸次的、長期的な移行過程としてとらえ、現代民主主義論、現代資本主義論をはじめとして、マルクス主義を修正・発展させようというのが共通の立場「党章派はアメリカ独占資本の権力という亡霊にしがみついている」と批判して、自説を次のように展開。「日本で国家権力を握っているのは、日本の独占資本である。したがってこれを打倒する社会主義革命が、わが国の唯一の革命であると考える。…しかし、当面すぐさま社会主義革命のための直接的闘争をやるうとは考えない。当面の闘いとしては、構造的改良を中心とする平和と独立と民主主義と生活向上をめざす革命的改良の闘いを考える。民族の完全独立は、この革命的改良の闘いのなかで、またその一つとして貫徹される」(東京党報五七・一〇)

新左翼創成の過程において歴史的意味をもっているのは、通称・山口一理論文「一〇月革命の道とわれわれの道」(東大細胞機関誌、マルクス・レーニン主義九号五八・一、佐伯秀光五四年東大理一進学)でした。それと併せて衝撃的なことは、無署名巻頭論文(執筆・生田浩二、五一年東大入学の末尾に登場した禁句なスローガン)「プロレタリア世界革命勝利万歳!」でした。この論文の内容とスローガンを細胞機関誌に掲載したことは、当時一枚岩の団結を誇っていた国際共産主義運動や日共総路線に対する根底的な否定と、自らの思想的、政治的立脚点を、天下に明らかにしたことを意味します。

この山口一理論文を号砲として、学生党员グループは公然と

党内闘争を開始、約一年後には「コペルニクスの転回」学連新

党結成」を遂げることになりました。他党派からは「トロツキーのノリカミ細工」「ブント裏切り史観の原典」(革共同探究派と酷評されましたが、批判されたその中味たるや、学生党员グループにとっては、思弁の次元に等しいというべきか、「頂門の一針」とはなりません。マルクス・レーニン主義の復権によって、革命論の原点を再指定しようとした、この論文の意義は、たんに理論の過渡性という内容上の評価として論じるべきではないという立場でした。

というのは、後述するように当時のトロツキスト・グループは、スターリン批判の旗手トロツキー「第四インター日本支部」を、啓蒙宣伝団体に代置するという組織戦術路線を、そのまま建党組織論の基底にすえようとした。

これに対して、学生運動に圧倒的ヘゲモニーをもつ日共学生党员グループの立場は、終始一貫していました。結局、彼らがたどり着いた結論は、平和共存路線下で右傾化を深める公認前衛党の指導から、全学連の戦闘性を死守することが自己に課せられた最大の責務と考え、新しい党創成はその運動を担う党であり、その党建設は、大衆闘争の爆発的展開を媒介にしてはじめて可能である、という考え方を、瞬時といえども捨て去ることはなかった、ということ。そのためにはロシア一〇月革命の歴史上の教訓の中から、忘れ去られた世界革命路線を復権させ、革命の未来を切り開く理論と実践をめざした、という事

上記の項目(一)に関しては、「労学同盟軍規定と、学生運動先駆性論は、革共同とブントの分岐点でもあった」(土屋源太郎、五三年明大入学)と指摘しているように、この二つの規定には重要な意味があります。ここでは違いを指摘するだけにとどめておきます。

厳密ないい方をすれば、明らかに結果論というべきですが、前者の「学生運動先駆性論」を強調したのは後のブント系であり、これは「戦術的ラディカリズム」に論理的根拠を与えたものです。後者の「労学同盟軍規定」を強調したのは革共同関西グループ系であり、これは「労働運動中心主義」に傾斜する論理根拠を与えたものです。この二つの論理は、ともに戦術論的転換の意義付けを強調する論理として提起された、実践されました。前者は破産し、後者は、一つの結実をみせました。

第一一回大会が、後世に残るような重要な歴史的ステージとなったのは、それなりの理由がありました。上記の項目(二)にかんして、大会は新左翼創成の契機になったことは明白です。全学連運動は、結成以来つねに闘争形態や戦術論をめぐって、日共中央VS反日共中央に体现されるような左右の矛盾を内攻させてきました。いまその積年の矛盾が、全学連結成一〇年目にして、論争という外形的装いをもって一挙に噴き出した、というべきでしょう。

全学連大会の半年前、「原水爆実験禁止国際統一行動デー」において、「ジグザグ論争」は派手に展開されました。論争は、そ

実が雄弁に物語っています。

五八年五月、全学連第一一回大会(参加者一〇〇〇名、代議員・評議員一九四名が開催されました。

本題に入る前に、大会人事をめぐる顛末についての引用からはじめましょう。

「運動の新しい展開は、新しい組織体制の確立以外にないことが認識されていた。五月三〇日夜、炭労宿舍であった全学連中執会議は、まさにそれであった。香山・小野寺ラインの否定と、塩川・土屋ラインの採択であった。長時間の論議の末の採択で、島は旧ラインの支持を行った。在京中執の抵抗で結局新執行部体制は、一二月の第一三回大会までかかった」(星宮煥生、五三年立命館大入学)。

全学連第一一回大会は、この引用からもわかるように、主流派内部においても人事をめぐる対立として表面化していた様子うかがえます。だが、それ以上に全学連主流派と反主流派の論争・対立が、全面的に露呈したのでした。

大会は二つの特徴があります。

1、「反帝、実力闘争路線」(帝國主義打倒、学生運動先駆性論、労学同盟軍規定、平和擁護闘争)を確定して、大きな転換を実現したこと。

2、結果的には、全学連結成一〇周年を記念すべきはずの大会が、一転して、新左翼創成をうながすための直接的な契機を与える大会になったこと。

のまま今回の第一一回大会に持ち込まれ、ついに過去数年間にわたる先端攻防の場において、宿命的対立に最終的な決着をつけるべきが来たのでした。その大会開催の意義については、「戦後一〇年を経て、はじめて日本学生運動が、日本のインテリゲンチヤが、そして日本の左翼が、主体的な日本革命を推進する試練に耐える思想を形成する偉大な一步を踏み出した」(東大細胞機関誌、一〇号)と位置付けています。以下は、全学連大会の模様、争点、問題点をみていくことにします。

「学生運動を内部から崩壊させようとする最も危険な傾向は右翼日和見主義であり、学生運動の不倶戴天の敵である。それは現に存在し、さまざまな形をとって運動の内部に忍び込みようとしている」(大会報告)。

大会は冒頭から反主流派代議員によって次々と出された動議や提案をめぐる紛糾し、ヤジ、怒号、混乱に終始しました。にもかかわらず、対立が沸点に達するなかで、大会の議事を混乱させるには十分な人数でした。ある大会傍聴記は、「多くの発言は組織への中傷、個人誹謗など、議事妨害であり、議場は暴力的に混乱させられた：昨春以来、全学連に対する攻撃と弾圧は異常な熱っぽさをもって行われている。：自称進歩的文化人なる小ブル・インテリゲンチヤからの休みなき嘲笑と誹謗、民主戦線内部からの学生運動に対する『極左冒険主義』『平和闘争オンリー者』などのレッテルと非難と中傷を浴びせた。：四日

間にわたる大会の会議中に起こったすべての現象（批判と反批判）（嘲笑と誹謗）は、今日の日本における思想闘争、革命運動の中に起こっている対立と論争の縮図であり、反映である」という事態が進行しました。ある早大反主流派学生の誠実な証言もあります。

「事情を呑み込めない私たち新米代議員はそこまでしなくてもいいという思いと、もしかするとまずいことになるかも知れないという当惑の気持ちが入り混じり、正直複雑だった。案の定、地方から上京した大方の学生達は、何のための争いかさっぱり掴めず、見方によってはたんなる派閥争い、少数派が一方的に大会を混乱させていると判断せざるを得ないような状況になった。さらには中執として中央ステージ上にいた清本（勇司・引用者註）の、いかにも不謹慎に見える何々大笑が火に油を注いでしまった。：残念ながら、意に反してもつばら悪役を演じているのは少数派、こうなったらもはや退場するしかなく、実際罵声を浴びながら会場を後にした。私が恐れていた杞憂は的中。この事件以後、しばらくの間私達は分裂主義者という、重い十字架を背負わねばならなかった」（六〇年安保と早大學生運動）。

この引用からも「微妙なカゲ」を読みとることが出来ます。それは、当時すでに流動化していた全学連反主流派内の、もう一つの党内分派闘争です。教育大細胞指導部の証言によれば、平和共存路線をめぐる綱領論争は反主流派内部でも、すではじまっていた。全学連第一回大会と、その直後に突発した

アジアと世界のプロレタリアートとの間に激しい闘いが行われており、このことが現在、『世界的激動』と呼ばれる諸特徴を規定している。：したがって、たとえ、ソ連が平和共存路線を掲げたとしても、平和は話し合いによって実現できるものではなくて、闘いとるものである」（第三回大会報告）。

このような戦闘的デモへの決意性は、平和を希求する強い決意性をあらわす意思表示でした。それと同時に、その論理は一つの階級情勢に対する認識に裏打ちされており、その後の階級闘争にみる歴史過程と結果は、平和共存路線が空無にも等しいことを裏付けていました。しかも、平和共存↓平和デモといった主観主義的論理を前提にした戦略・戦術の指定が、選択可能な闘争路線であると断定できるほどに、当時の階級情勢は明快な回答を与えてくれたわけではありませんでした。

これに対して、全学連反主流派は「幅広いデム論」を対置し、幅広い大衆の共感を得るような戦術形態をとるべきである、という主張を展開しました。

「国際政治における社会主義の物質的優位とその指導権の確立と植民地民族運動の昂揚により、：世界情勢は平和勢力の側に有利となり帝国主義者の戦争政策は、もはや、開戦を前提としないものとなっている。：闘争は、帝国主義者を封じ込める闘いであり、：恒久平和への軍縮と核兵器禁止：平和へのおらかな見通しをもつ幅広い国民を結集しなければならぬ」（神戸大細胞機関誌「神大新評論」というものでした）。

「六・一事件」よりも以前の段階で、一部の全学連反主流派学生党员グループは、党中央の方針に対して不満を抱き、首都圏反主流派の双壁をなしていた教育大細胞の構改派指導部数名（黒羽純久等）はすでに離党、のち復党していたのでした。

全学連第一回大会は、大会議案を二七一対一九保留一で可決、反対派の途中退場、という異常事態を除けば、議事運営はお決まりの経過をたどって閉幕しました。主流派による中執三〇名の独占、反主流派系中央委員若干名の罷免、という新執行部人事も、先にみた舞台裏の攻防を封印すれば、めずらしい結末ではありませんでした。だが、大会の論争に関しては次元を異にしていた、といえるでしょう。

会場における左右の攻防が、大会の性格を規定していたとはいえ、激論の背後には非妥協的な綱領・戦略論争が伏在していました。論争は、革命運動が胚胎する基底部をあぶり出したのです。主流派が主張した戦闘的デモの根拠は、資本主義体制から社会主義体制へ向おうとしている現代過渡的世界の基本的矛盾は、「体制間矛盾」ではなくて、「賃労働と資本の矛盾」という基本認識に根ざしていました。

「現代の特徴は、一九一七年に始まる資本主義から社会主義への転換の歴史的過渡性であり、：資本主義世界体制が自らの内部の法則によって生み出す矛盾につらぬかれていく。：この矛盾こそが世界資本主義体制をして、一つの危機的状況に陥れている。：この危機の克服をめぐる、世界の帝国主義ブルジョ

主流派と反主流派は真正面からぶつかり合い、激論を展開しました。結局、両者が直接対決する「論争の場」としては、この第一回大会が最後になってしまいました。

しかも、この全学連大会が終了した翌日、学生運動史上に残る重大事件といわれた「六・一事件」が突発したのです。後に詳述しますが、共産党中央指導部と全学連主流派党员グループ（二〇名、一四〇名）が、党本部会議室において直接衝突するという、暗転の修羅を演じたのでした。

党中央は、全学連大会の混乱を收拾するという名目で、学生党员大会代議員グループ会議を党本部に召集しました。ところが、その会議の冒頭席上、学生側は「大会の攪乱の指揮をとった党本部学対部員に対する弾劾と責任を追究」して、会議を召集した党本部役員と物理的に衝突したのです。

衝突事件は半ば「内的必然性を帯びていた」といういい方も十分可能です。

例えば、党中央書記局学対会議の席上「東欧暴動の学生の行動は反幹部・反革命的だ。同じように日本学生党员は反中央にみちており、対策が必要である」という袴田常幹発言もその一つです。この幹部発言は、事件の前触れとはいえませんが、党中央と全学連党员グループとの政治的矛盾が、半年前の「山口一理論文」「プロレタリア世界革命勝利万歳！」

以来、すでに新たな事態を暗示していました。一本のマッチが、燎原の枯れ草を焼き尽くす結果になったに過ぎません。と

はいえ、事件発生は、事前に準備された行動ではなく、想定外の出来事であったことは間違いありません。にもかかわらず、この事件をきっかけにして事態は急変し、「学連新党」ブント結成へと急展開をみせたのでした。その前に、日本トロツキズムについてみておきましょう。

4 スターリン批判と、日本トロツキズム運動の台頭

日本共産党が結成されたのは一九二二年でした。それ以来、日本共産党の前衛党としての党活動は、あの昭和期の「黒い行列」(野上弥生子)が先導した反動の一時期を除いて、前衛党であり続けたのでした。その公認前衛党に対して、歴史上はじめて公然と反旗を翻す政治的潮流が登場したという歴史の事実をもって、新左翼運動の源流と規定するならば、そのイデオロギーの源流の一つは日本トロツキズム運動といえます。

周知の通り、元祖トロツキーは、ロシア一〇月革命においてソヴェット軍事革命委員会議長として主役を演じ、レーニンと並んで輝かしい功績を残しました。二九年の時点で、すでにロシア一〇月革命の命運を「ヨーロッパ革命、世界革命」の発展にゆだねるといって「世界革命論」「永久革命論」を展開し、レーニン亡き後の三八年「第四インターナショナル」を創設しました。それ以来、スターリン「コミンテルン」(第三インター)に抗する唯一の国際組織として、活動を展開しました。そのため、「一国社会主義革命路線」を主張したスターリンにとっては最大かつ最

悪の「反逆者」となり、反革命、スパイ、挑発者、抹殺の代名詞とされ、四〇年、遂にスターリンが放った刺客の匕首に倒れ、非業の死を遂げたのでした。

日本における戦前のトロツキズム運動は、自己史を刻むことはありませんでした。スターリンによる共産主義運動の歴史から抹殺されたという特殊な歴史経過があり、トロツキーの著作が翻訳されたこと(青野季吉「わが生涯」他)以外には、痕跡もありません。

日本最初のトロツキー主義者として活動を開始したのは山西英一でした。三〇年代恐慌期のイギリス留学中にトロツキーの存在を知り、帰国後は中学英語教師をしながら、四九年頃から「裏切られた革命」「ロシア革命史」「中国革命論」次は何かなど、トロツキー著作・文献を翻訳・出版。五一年に左派社会党に入党、三多摩地方で啓蒙主体の独自活動を続けました。

その他に、五〇年代には少数の人達が山西英一の翻訳文献や、対馬忠行の著作(日本におけるマルクス主義「三元社、四九年」)クレムリンの神話「実業之日本社、五六年」に直接影響を受けて、サークル活動や個人的啓蒙活動をはじめました。「互いに連絡もついでいない状況で、五つのトロツキストグループが存在した」(軍共同小史)といわれています。

初期日本トロツキズム運動は、このような形ではじまりまったわけです。いわば「神話の時代」ともいえる、この五〇年代前半が、イデオロギーの源流の最初の一滴といえるでしょう。

五六年の「スターリン批判」と二つの「反政府暴動」は、一七年ロシア革命以来の東欧社会主義のはころびを露呈したという意味で、衝撃的な事件でした。これら一連の事件を境にして、初期の日本トロツキズム運動は、「第二期反スタ・トロツキズム運動」へと旋回していくことになりました。

ソ連第二〇回党大会で批判の対象となったスターリンは、当時の国際共産主義運動内にあつて、超絶的無謬の存在者として、玉座に君臨していました。そのような独裁者の死と、死後三年目に行われたフルシチョフ「秘密報告」は、個人崇拜、権威主義、官僚主義批判という限定的領域にとどまったかと思えたのですが、その思惑をはるかに超えるものでした。スターリン批判に次いで提起された「冷戦体制の解体」「雪解け」「平和共存路線」という新しい戦略路線への移行は、一国社会主義、ゆがんだ国際主義を含めた国際共産主義運動の総路線に対する再検討を迫るものとして、重要な一石を投じたのです。やがては、レーニン死後のマルクス主義哲学、思想、経済理論など、既存のイデオロギー、教義「ドグマ」、共産主義理論からの自己解放を模索する直接的な契機となったのでした。いわば国際共産主義運動の「夜明け」とされました。

とはいえ、「スターリン批判」「東欧暴動」の余波に関してみれば、必ずしも、日共党員の多くが即応的な反応を示したわけではありません。後世において「革共同史観」として語られるほどには、当時の国内の運動に対して、より直截的に政治的、

思想的、理論的影響を及ぼしたと思われる事実を指摘することはできないからです。

初期のトロツキズム運動が、新左翼創成に、どれだけの波及力をもって受容されたのか。その宣伝活動の影響について、計量するわけにはいきませんが、少なくとも、新左翼創成に至る運動のなかでみる変化と発展は、そのダイナミックな運動過程における実践上の結果に示されています。その変動過程は、あくまでも闘争を直接担った実践主体による、固有の論理と路線選択の下で継起したということです。この事実は重要な意味をもっています。つまり「スターリン(主義)批判」と「東欧暴動事件」がもたらした影響と衝撃の範囲は、きわめて限定的に過ぎませんでした。以下、当事者たちの証言を引用して、歴史を補足しましょう。

例えば、ハンガリー事件は、第二次砂川闘争勝利報告集会の七日後に発生したのですが、その同じ月に開催された東大学生細胞総会では、ハンガリーの社会主義圏離脱反対、ソ連介入支持」を決議したのでした。フランスの実存主義哲学者ジャヤンIIポール・サルトルも第一次介入に関するかぎりは同様の立場でした。この細胞決議は、当時の多くの共産党員や学生党員の心情を代弁していたのです。以下は二人の証言です。

「ソ連の人工衛星スプートニクがアメリカに先んじて打ち上げられたとき、ちょうどわたしたちは細胞総会を開いていた。そのときスプートニクのニュースが入った。軍事的共産主義

者の野矢（テツオ、引用者註）が総会の中断を提案し、わたしたちは野矢に続いて東大正門前に行き、スプートニクが飛んでいるはずの夜空を見上げた。野矢は有頂天になって、社会主義は勝つ、と絶叫した。そして私も生田も野矢と握手を交わした（富岡倍雄、五七年東大経済進学）。

「僕なんか、あまり問題にしなかった。…ハンガリー事件のときは、むしろソ連支持、反乱断固粉砕せよという方についていった」（島成郎・筆名熊谷信雄、五〇年東大入学）。

このような「ソ連介入支持・反乱断固粉砕」の論理と心情の背後には、五〇年版『ソ同盟共産党小史』が与えたような、文献上の影響を無視することはできません。小史一二章には、共産主義・社会主義の未来に希望を抱く人々の期待にこたえて、次のような「幻想的記述」があります。これを読む限り、ソ同盟が世界プロレタリアート期待の星であつたとしても不思議ではありません。

「一九三六年におけるソ同盟は、資本主義的要素を完全に絶滅し、社会主義工業は戦前生産高を七倍も越え、ソフホーズとコルホーズは世界最大規模で機械化され、クラークは絶滅した。人間による人間の搾取は永久に根絶された。恐慌、貧窮、失業、零落は永久に消滅し去つた（ソ同盟共産党『ボ』小史）。

このような基本認識は、次のような歌詞を生み出したのでした。大学露文科コンパや、メーデー帰りの二次会で歌われたものです。

「ふるさとの声が聞こえる、自由の大地から、何よりもわれら慕う、なつかしソヴェトの地、世界に類なき国…」

同じ日共党内反対派「構造改良派」グループは、別な見解をもっていました。彼等は世界的激動と軌を一にするかのようになり、理論集団を形成していました。その最初の理論講座「現代マルクス主義」I巻の序文では、次のように記しています。

「日本での『六全協』、ソヴェトでのスターリン批判、つづいてポーランドとハンガリー…こうした衝撃を受けてからここ二、三年のマルクス主義者の状態を、ジャーナリズムの世界から『ショック死』とか『よろめき』とか、いろいろなことばで揶揄する声が聞かれる。しかし、こうした外部からの政治的事件以前にも、現実の発展にたいする理論のたちおくれについて、深刻な反省があつた。それをとりだして、現代の提起する課題にできるだけ正確に答えてみたいと思う」（古在由重、長洲二二）。

では、トロツキーの思想、政治路線の支持者、第四インター調者（二〇％トロツキスト＝純トロ）派、どのように受け止めたでしょうか。「スターリン批判」「東欧暴動事件」は、まさに、衝撃的な意味をもっていました。レーニン没後、スターリン批判を生涯貫いたトロツキーの思想と理論、その決意と信念を継承するトロツキストや、終始一貫スターリンを弾劾・告発し続けてきた人達にとって、いまや「不動の自己確信」を見事に立証してくれた歴史的な大事件として、一連の事件は特殊な意味をもっていました。まさに、「スターリン批判」は千載一遇の好機でした。

このような時代の背景の下、五七年「日本トロツキスト連盟」（第四インターナショナル日本支部準備会、革共同の前身、ブント系の俗称、四トロ&トロ同）は、「思想啓蒙サークル団体」として結成されました。メンバーは、内田英世・富雄兄弟、太田竜、黒田寛一など七名〜八名でした。

そのうちの一人、太田竜は五二年頃から運動を開始、田中吉六などの影響を受け、山西、対馬に影響されてトロツキズムに接近したとされています。「第四インター」国際組織と連絡を取り、社会党への「加入戦術」を行使していました。

黒田寛一は、同盟結成当時は、トロツキーの文献は読んでいなかったようです。戦後の三大論争（主体性論争、技術論争、価値論争）を通じて思考を深め、梅本克巳、三浦つとむ、梯秀明の哲学主体性論に強い影響を受けながら、独自の「唯物論的主体性論を確立しました。とくに、「永遠の今論」にあるような政治論や、その共産主義的人間観を、梅本哲学の倫理主義的観念論に求めている点の特徴の一つです。補足ながら、ブント創成の立て役者の一人姫岡怜治（本名青木昌彦、五六年東大入学、筆名はレーニンにあやかったの表現を借りれば、「もう一人の影の主役は、ブントの穏やかな組織形態を脇からシニカルに批判していた『盲目の哲学者』黒田寛一」ということになります。「皮膚結核」による失明と頭髪が抜け落ちた黒田は、グラスに帽子姿で同調者を求めて足を運びました。

結成前後のトロツキスト・グループは、最大七系列〜八系列

でした。そのうちの三系列が、トロツキスト連盟結成に参加しました。

組織拡大のための戦術は「手工業的手法」でした。サークル集団特有の「学習会」「喫茶店オルグ」に象徴されるように、個人オクルグの主要なターゲットは、日共学生黨員や活動家でした。機関紙、パンフレット、手紙類を手段にして組織の拡大を図りました。

五七年春、関西グループが連盟結成直後に合流しました。この関西グループ（通称・関西派・黒田命名、以下通称名も併用）は、西京司、日共地区委員岡谷進、星宮煥生（立命館大細胞・全学連副委員長歴任）でした。いわば、この合流によって「連盟三派体制」（内田グループ離脱が出来上つたことになりました。太田派、黒田派（探究）、関西グループによる三派体制）によって初期トロツキズム運動は、「点」から「線」へと発展を遂げ、思想・理論の啓蒙段階から、運動体へとレベルアップする最初の足場を築くことになりました。

そのうち、西京司や岡谷進は日共党内にとどまらず、公然と「居残り戦術」を展開しました。そのような活動の具体的成功例の一つが、「日共京都府報」（五八・二二）に堂々掲載された「レーニン主義の綱領のために」（沢村義雄）でした。

個人ブレイの色彩が濃厚であつたとはいえ、同盟内では「原則的な加入活動」と評価され、組織戦術は一定の成果を上げたようです。例えば、初期の京都府学連の指導部は、西京司グループ

プの個人オルグが成功して主導権を獲得し、立命館、同志社、京学大にも一定の浸透をみせていました。しかし、その後の対日共中央との党派闘争の過程において露呈したように、大衆闘争を直接介入させないかぎり、綱領論争を軸にして批判しても、組織Ⅱ運動の主導権を確立することは困難でした。

「日共学対委では毎回、西流の『スターリン批判』なるものをまくし立てるのだが、失礼ながら、現実的。実践的内実がまるでない、平板で主観主義的な知識を羅列するだけのインチキという他はないもので、私はいつも『似て非なるもの』と憤慨していた」(北小路敏、五六年京大入学)。

5 トロツキズムの思想的、理論的、政治的役割と影響の度合い

以下、トロツキスト連盟結成以後の、ブント系諸グループに与えたその思想上、理論上の影響と政治的役割についておきます。東大細胞に関しては、富岡倍雄が『ブントの思想五』において詳細な記述をしています。

それによるとトロツキズムとの最初の接触ルートは、五七年五月経友会・自治会室に、トロツキスト連盟の機関誌『反逆者』(のち『第四インターナショナル』)機関誌がさりげなく置いてあった頃から始まったようです。もう一つの接点は、佐伯秀光と黒田寛一との個人的接点です。黒田は五三年当時『東大自弁研』(東大自然科学法研究会・理哲学サークル)に外部から出入りしており、五二年東大入学の佐伯と知り合ったものと思われれます。

ませんでした。逆にトロツキスト連盟の活動の実体にもふれるにつれてトロツキズム運動とは距離を置くようになりました。

「トロツキーは共産主義者として尊敬心と親近感を持ったが、トロツキストにはならなかった。トロツキズムには、スターリン主義批判のための武器はあったが、革命のための思想と理論体系がなかった、という点につぎる。…学生党員を洗脳することによって、学生達が構築してきた、運動を寡奪しようとする方針をとってきた。佐伯や生田は、だから、運動としてのこのトロツキー連盟を歯牙にもかけなかった」とのことです。

トロツキスト連盟が「革共同」(日本革命的共産主義者同盟へ改称した時期と同じ頃)で、島、生田、佐伯の三人は「党内分派結成」を申し合わせ、自己を一つの政治的潮流として位置付け、公然と論争を提起することを決意したのでした。彼らが展望した先は、半年後に開催が予定される日共第七回党大会における綱領論争でした。東大細胞では、それに向けて内部討論を開始、その半年後の最初の成果が「山口一理論文」であり、「プロレタリア世界革命勝利万歳!」のスローガンでした。五七年一月、マルクス・レーニン主義九号』が刷り上がった大晦日の夜は、興奮気味だった、といえます。さらに三ヶ月後の、五八年三月東大細胞総会が開催され、ソ連論を含めた社会主義論の必要性が提起されました。その際、富岡が、

「民族民主革命に対しては社会主義革命、二段階革命論に対しては世界革命を提起して、国際共産主義運動の積年の誤謬を

この二つの接触ルートとは別に、いわば、トロツキズムと隣り合わせにいて、独自に理論的思想的に転回を遂げた人物がいます。それは東大細胞生田浩二(筆名加藤明男、五三年東大入学)です。彼がたどった理論的軌跡とその起点は、いわば、新左翼創成の理論的源流の一つに加えることができるかも知れません。

「要するに生田は、この一九五七年の七月という時点で、すでに、平和擁護闘争一辺倒から、対日本資本主義闘争へと自分の中で方針の軌道修正をおこない、それを単身実行に移していたということができる」(富岡倍雄)

生田は、当時の日共根強く残っていた二段階革命論の淵源をたどつてゆくと、講座派二段階革命論に行き着いたといえます。その日共民族民主革命路線(二段階革命論)から社会主義革命路線(一段階革命論)へと理論的な路線転換を考えたわけですから、その際の問題意識の対象が、それまでの二段階革命論の元祖Ⅱ講座派から、新たな労働派と社会主義革命論への共鳴や、宇野経済学の世界史的規定性にはじまる世界資本主義の経済論に及ぶとともに、トロツキーの世界革命論Ⅱ永久革命論なども視点に取り込む、新たな世界革命論構築への道を提起するなど、新鮮な感動をもたらしたといえます。

「複雑でモザイク的にか見えぬ世界を一挙的に統一的に理解させてくれる、シャープなレンズのようなものだった」(富岡倍雄)といえます。

ところが、彼ら東大細胞が向ったのはトロツキストではあり

批判した」のに対して、生田はさらに問題提起をしたといえます。その内容の一つがソ連論でした。富岡の受け止め方は、「ソ連では生産手段の私的所有は廃絶されてその国有化が実施された。だが、生産手段の国有化は、ソ連の賃金奴隷制を撤廃したか。階級が消滅し、商品や貨幣を一掃したか。そして、国家は死滅したか。事態はその正反対のことをしめている。社会主義という外皮をかぶった前近代的な党閥国家」(ブントの思想)ではなかったか、というわけです。

このように、トロツキズムが投じたさまざまな初発のイデオロギー的波動は、確実に一つの流れをつくり出したといえます。以下、いくつかの事実経過をエピソード的に付記しておきましょう。

反スタ・トロツキズム側がこころみた、日共系学生党員グループに対する初期の接点の一つに、早大細胞片山迪夫(五四年早大入学)があります。トロツキスト連盟結成後、片山は哲学的好奇心から、まず、対馬忠行『日本におけるマルクス主義』(四九年)『クレムリンの神話』(五六年)を読み、対馬忠行と親交を結びました。つぎに、黒田寛一の処女作『ヘーゲルとマルクス——技術論と史的唯物論序説』(五二年)を読んで黒田寛一とも知り合ったそうです。その後、アナキスト大沢正道(平凡社編集長)を加えて、三人の初対面を経て、双方が仲間を連れて定期的に喫茶店(高田馬場・大塚)で会うようになったといえます。

高野秀夫の全盛期を過ぎた頃、日共早大細胞有志による「研

究会」も発足させ、黒田寛一を呼んだこともありました。この時期は、ちょうど片山迪夫の高校時代の同級生・佐伯秀光が東大自研のなかで、黒田寛一と知り合い、二人が手紙を交換していた頃です。「山口一理論文」が書かれた時期とも重なります。

片山迪夫は、反スタ・トロツキズムを援用しながら、スターリン批判、フルシチョフ平和共存路線批判、対日共党章派批判を深めていきました。トロツキー教条主義には批判的で、第四インターの評価、加入戦術論、過渡的綱領論に関しても同様でした。ソ連論では、トニークリフ対馬忠行の「官僚制国家資本主義論」を支持し、第四インターの「墮落した労働者国家論」には反対でした。総じて、トロツキズムを「批判的に受容する」立場を堅持していました。

その片山には、同級生佐伯秀光のグチにまつわる、ある記憶が鮮明に残っています。

「参つたよ。手紙の中身が筒抜けだよ。……クロカン宛に来た手紙の封筒を裏返して再利用し、それに切手を貼って寄越すんだ。これでは、誰がクロカンと文通しているか判つてしまふ。弱つたよ」

佐伯が抱いた困惑は当然でした。対権力闘争や党派闘争を展開するうえで「警戒心が欠如している」となれば、首をかき上げたくなります。「なぜ、クロカンがエコなのか」という疑問も生じる話です。医者のお曹司・黒田寛一が、貧しい石川啄木の「儉約」を見習ったとも思えません。もしかすれば、そのような無頓着

事件」等の外在的要因を契機にして対立が激化します。そのなかで、学内の闘争現場や細胞活動家の間では、全学連主流派への実践的支持が高まり、やがて、社会学や各自治会細胞単位でも、多数派を実現したのでした。

早大細胞総会は日共都委員会で開催されました。高野II清本を「党費流用」で追求するなどの批判材料もあり、全学連主流派を「党費流用」や若手社会学同グループ(平井吉夫五八年早大入学)による反主流派執行部の追い落としが実現しました。新たな細胞指導部は、主流派II小泉修吉・本多延嘉・西江孝之・惣川修グループでした。

「名簿に登録した党員は二〇〇名、日本一を自慢できた高野達は、当時鼻高々だった。総会出席者は八〇名くらいだった、と記憶している。両派の勢力比は拮抗していたが、「党費問題」も多少は味方したかも知れない。小泉IIポインタ(本多延嘉)ライオン成立時の彼我の勢力比は、八〇名七〇名位で多数派だった」(惣川修、五七年早大入学)。

「当時、早大新聞会にいた本多は、五七年末の連盟改称の頃には革共同に加わっていたという人もいたが、定かではなかった。新聞には、高野のインタビュー記事(五六年一一・二三)や、黒田の疎外論を早大新聞に連載していた。トロ連・探究派メンバーでありながら、組織の実態がなかったこともあり、早稲田では強引な働きかけをしなかった。自治会執行部では教育学部に影響ももつ仲間がいた。ブンド創立大会でも、おとなしくて

さは、二年後に起きた第二次分裂の引き金になった、名簿にまつわる「スパイ事件」に通じることかも知れません。いずれにしても、黒田の真意を確かめたくもなるようなエピソードといえます。

片山は、高野秀夫の影響下にあつた日共早大細胞のLCをやつていた時代に、早大サークル「ソヴェト研究会」(ソ研)機関雑誌に、片山迪夫・小泉修吉(五六年早大入学、共に高校時代民青に在籍)の連名で、「スターリンのくびきからの解放宣言」(平和共存批判)を、本名で掲載しました。禁断のトロツキー名を伏せた「奴隷の言葉」でカムフラージュをしたその論文の掲載を、佐伯秀光は、生田浩一から知らされたそうです。これらの事実からもわかるように、東大細胞・早大細胞双方は、個別並進、同一方向に向つていたことになりました。

間もなく「六・一事件」が突発しました。この事件をきっかけにして、日共早大細胞においても、全学連主流派VS反主流派の対立は激化し、学内分派闘争も本格化します。片山は、すでにその年の三月に卒業していましたが、後に早大生協に仕事をえて活動を再開します。細胞活動は小泉修吉や本多延嘉(五二年早大入学、のち革共同書記長、七五年内ゲバ死等に引き継がれていました)。

それまで早大細胞の主導権は、党中央に直結する高野秀夫・清本湧司・野口武彦グループが握っていました。しかし、全学連第一一回大会の「主流派圧勝」「早大一文自治会の孤立」「六・一

拍子抜けしたような記憶がある。当時の早大細胞は、まだ流動化状態にあり、結成大会には個人レベルで数名が参加した」(片山迪夫)。

その時期に、島成郎、塩川喜信、本多延嘉、西江孝之の四者会談があり、その席で「四人は別党コースを確認した」(塩川喜信、五四年早大入学、全学連委員長)。

いずれにしても、このような一連のさまざまな動向は、ブント結成を支えた東大II早大グループ形成の裏面史の一部をなしています。とくに、早大細胞におけるヘゲモニー移行は、ブント結成にも一定の影響を与えたことは確かでしょう。

「反戦学同委員長中村光男(五二年早大入学)は、『探究』創刊号(五七二〇)を黒田から受け取ったあと、次のような返事を黒田に書いています。時期は、東大細胞機関誌に「山口一理論文」が掲載される直前です。

「創刊号の内容には体系的に反対です。しかし、機関紙誌の交換は続けたい。スターリン主義という規定は、スターリンの思想的、政治的、組織的偏向と、その諸結果を完全に解明しつくすための有効な規定ではなく、逆に全ての誤謬を一律になげうってしまう結果を生む。大衆闘争に責任を持つ者としての発言の観点から、小集団万歳主義にとらわれている」。

この返事に対して黒田は「反戦学同はスターリン主義に立脚している。トロツキズムの洗礼を受けないかぎり、腐敗しきつたスターリニズムの泥沼から脱却できない」(『探究』二〇号)と批判

し、反戦学同をスターリン主義左派と規定し、スターリン主義、フルシチョフ修正主義を捨て去るよう、注文をつけたのでした。東大細胞富岡倍雄の回想によれば、山口一理論文が起草された時点で「トロツキーもいいことをいっているよ」といった程度であった。また、五八年七月日共第七回大会の直前に、黒田の手書きの回状が山口一理論文で、東大細胞委員会に回ってきたのですが、「面白がつて読んだにすぎない」という反応を示したということでした。別な証言もあります。既述したように当時、東大自治会室にも、トロツキーの文献や刊行物がさりげなく置いてあったわけですが、

「トロツキーなんて国際共産主義運動にとつては極悪人でしょう。『真面目』な党員はそんなものは決して読まないけれども、ところが、生田や佐伯なんかはずるいから、表では批判しながら、裏では持つて帰って、こっそり読んでいたようです」(古賀康正、筆名坂田静朗、五四年東大入学)。

「最近、『真相』探究等の雑誌で、本誌のことが論じられている。われわれはかかる暴露雑誌をまじめに相手にしてはいないし、ましてや『真相』が、われわれといわゆる『第四インター』との結びつきを疑わせるようなことをいつているのは、全く事実無根であることを一言しておく」(編集後記『マルクス・レーニン主義』一〇月号「五八五」)。

◇補足 トロツキスト連盟の沿革(續成五七二)

九月

・全学連第一二回大会「勤評闘争を徹底した非妥協的政治闘争」(実力闘争路線)の確認(委員長香山健一、副小島弘、佐野茂樹、書記長小野寺正臣)

一〇月

・日共青学部「学生運動の極左的傾向と学生党員の思想問題」(アカハタ)

十一月

・一三日…法政大細胞ピラ批判『学生運動にもぐりこんだ挑発者とたたかえ』(アカハタ)

・三〇日…立命館大細胞のトロツキスト集団の破壊工作」と批判(京都府党報号外)

十二月

・三日…日共第三次処分(四七名)

・一〇日…学連新党「共産主義者同盟」(ブント)結成

・一二日…全学連第一三回臨時大会、中執人事は革共同関西派系が主導(委員長塩川喜信、副小島弘、加藤昇、書記長土屋源太郎、書記次長清水丈夫)

・日共幹部会論文「学生運動における党活動の問題点」(アカハタ)

六・一事件が突発しました。日共中央指導部と、学生党員グループが直接衝突したのです。最後には「中央委員の罷免要求」

五七年二月「革共同」へ名称変更。

五八年七月 革共同第一次分裂…太田派(ソ連論…墮落した労働者国家、「反帝国主義・ソ連労働者国家・無条件擁護」、パプロ主義、加入戦術路線を主張し、自らは「関東トロツキスト連盟」結成、その後「日本トロツキスト同志会」「国際主義共産党」)。

五九年八月「革共同第二次分裂」…黒田派は「革共同全国委」結成、「反帝、スターリニスト官僚(政府)打倒」「反帝・反スタ主義」を対置して分裂。

6 別党コースII学連新党結成への道

六月

「六・一事件」突発

・党中央声明発表「一部悪質分子と反党的思想粉碎」

・全学連書記局細胞、党中央へ「上申書」(事件への反省と要望)

・日共第一次処分一六名

・日共中央書記局「全学連グループの規律違反行為及び若

干の事実について」(アカハタ)

・日共立命館大学生細胞「意見書」

・七月日共第七回大会、一日間泊まり込み、党章草案を

継続討議

・日共学生細胞第二次処分(九名)

・革共同第一次分裂、「第四インター日本支部」問題、トロ

ツキスト同志会結成(太田竜)

という事態に至りました。この罷免要求決議を最後に、混乱の事態が終息したのは、約九時間後の夕方七時頃でした。

学生側が演じたその日の行動は、学生大会の延長というに等しく、どう見ても「戦略なき無謀」という他はない、という見方も成り立ちます。その理由は、すでに六・一事件にのほろか以前から、東大学生細胞指導部は、全面的な綱領論争を展開できる場として、七月、日共第七回大会を想定していた、と思われるからです。

さらに、「六・一事件」にちかい段階においても、党内論争の範囲と規模を広げていました。党大会では二名の代議員権を持ち、党中央委員会、党都委員会(島成郎、森田実)、党文京地区委員会(地区委…生田浩一、古賀康正、中村光男)の各学対部レベルでも発言権を持つており、綱領論争をすすめていきました。その論争を経て、武井昭夫、安東仁兵衛、津島薫は、オルグの特別対象として陣営内への合流・獲得をめざしていきました。だから、六・一事件が「学連新党・別党コース」への流れを加速させたこと以外の獲得物がなかったとすれば、広範な党員獲得を意図した戦略路線に影を落とす結果になったといえるわけです。

衝突事件は明らかにハプニングというべきでしょう。

例えば、グループ会議を党内分派闘争の総決起の場とするには、ある程度、事前の計画性が不可欠ですが、その気配はありません。反中央フラクションの存在、動向、アピール文の準備、当日の行動指揮系統、造反後の展望等、その存在を裏付ける証

言はありません。部分的な状況証拠さえも皆無です。また、全学連「社学同グループ」が「全国合同フラクシオン」を結成したのは、第七回党大会直前、「一六名除名処分」がきっかけでした。このような、党の内部変革を目的にした「フラク」形成過程を経て、党と訣別して「新党結成」をめざすという「別党コース」が始動したのは、事件後二ヶ月半、八月中旬です。さらに島成郎が「別党創立を決議したのは一〇月」(富岡倍雄)ということですが、このような一連の事態の推移が、事態の真相を物語っていることは明白です。

全学連大会代議員グループ会議には、島成郎は出席しませんでした。事件の主役を演じたのは、最前列の二〇名と三〇名くらいでした。「スターリン批判」の急先鋒メンバーといえども、後ろから成り行きを見つめていたといえます。その後の経過をみても意図的な挑発行為という推論も成立しません。

いずれにせよ、若き共産主義者達は、ルビコンを渡ってしまつたのです。もはや、立ち向かう他はありませんでした。結果的に「六・一事件」は、大きな決断を迫られた瞬間になりました。既成前衛党のあらゆるドグマ、あらゆる権威、あらゆる桎梏から自己を解放する決意を迫られたのです。と同時に、初動の劣勢が否めないような、不利な「戦況」のなかで、勝利への道は決して平坦でないことを、思い知るほかはありませんでした。

「左翼反対派は形成されていなかった。…全学連グループの革命的分子は、代々木官僚に対しておくれをとつた。代々木官

党派利害を超えることはありませんでした。六・一衝突事件に関する限り、事件の原因と結果の相関性や、問題の本質を明らかにし、批判の一端を党中央に向けるという、党内民主主義の獲得にも無関心でした。わずかに共産党都委員会が「予断を持つて断罪してはならぬ」と強調したくらいでした。若き党員グループの立場から、意見表明するはずの二名の大会代議員(島、生田)は、対岸にいるかも知れない仲間の存在を、大会会場で確かめることすらできませんでした。

おまけに、その主観的願望もうたかたに過ぎませんでした。党員グループの指導者生田は、「党内闘争勝利」(処分者の復党措置)というような、自分たちに有利な事態の可能性に、最後まで希望を託していた(富岡倍雄)といえます。

このような重苦しい事態が進行するなかで、東大細胞、社学同、都学連若手グループは五八年四月段階で、すでに、「反党中央のフラクシオン」(党内分派)の全国的組織化を主張したのでした。しかし、全学連グループ(森田、香山、小野寺、小島に代表される旧世代は、共産党や社会党の左派グループまで糾合することを視野に入れていたし、島、生田も、日共第七回大会を、「主戦場」と考え、分派闘争の行方に勝算と期待感を寄せていたのかも知れません。

それに加えて、生田がみせたあの「主観的願望」にみられるように、「六全協」以前の時代経験を持つ旧世代は、「一枚岩の党神話」「絶対無謬の党」「不動の忠誠心」の忌まわしい呪縛からの離

僚の日和見主義的裏切り方針と対置された革命的理論と綱領が党内外大衆に示されないままに、…全学連グループは党内外から孤立させられ、官僚の攻撃に対する闘いは、党内において一時的に敗北せざるをえなかった。日共第七回大会は、反対派分子の不満が異常なまでに大きかったことを示しながらも、革命的左翼反対派の無存在ゆえに、そして、代々木官僚の狡猾なかけひきによって、彼等の支配をくつがえさないうちに、…終幕となった。…党内反対派はその理論におけるフルシチョフ路線の限界と、党についての「一枚岩の団結」のドグマのとりこのゆえに、革命的学生のかかる行動に恐怖心を抱き学生共産主義者の「暴挙」を嘆くのみだった。反対派制圧のためのあらゆる知恵をしぼっていた代々木官僚は、反対派のこのような消極性と限界を見てとつて、この事件のデマゴギー的プレス・キャンペーンをすることによって、自己の地位を固めるために最大限利用する方針を固めた(島成郎)。

共産党中央は「世界の共産党の歴史にない党規破壊の行為であり、かれらは中委の権威をきずつける反党反革命分子である」と、連日キャンペーンをくり返し、調査、査問(一呼び出し・取り調べ)を開始し、除名・党員権停止などの処分者は、年末までに合計七二名に達しました。被処分者が、他の党員に対して自己を主張し、宣伝扇動する場を奪い去つたわけです。

上記の引用にみるように、日共第七回大会は一日間、泊まり込みで行われ、事もなく閉幕しました。党内反主流各派も、

脱途上にあつた、という仮説も十分に成り立ちます。何故か。スターリン時代の肅清・恐怖政治のなかで生み出された「分派」への極端な恐怖心が、「分派闘争」貫徹の方向ではなく、「統一委員会」結成に向かわせたという歴史の事実は、生々しい記憶として脳裏に焼き付いていたとしても、決して不思議ではありません。あの当時、「所感派」「国際派」のいずれを選択したとしても、政治的死を意味する「分派」がもたらした恐怖は同質のものでした。

だから、今回の若手グループたちの全国フラク形成と分派闘争の「即刻開始」という提案が、旧世代に拒まれ、七月、日共第七回大会直前まで引き延ばされたとしても、それは当然かも知れません。フラク機関誌「プロレタリア通信」創刊も九月のことでした。

九月、全学連第一二回臨時大会が開催されました。前回の全学連大会からわずか三ヶ月後でした。秋の闘争方針、とくに動評阻止闘争の全国体制を確立することが目的でした。病臥にある香山委員長に代わつて島成郎が方針を提案し、三役人事では、あえて書記次長ポストを新設して土屋源太郎(都学連書記長五三年明大入学)を配置したのでした。若手グループの台頭や地方学連の突き上げによって生じた世代間ギャップを緩和し、不満を沈静化するためには、もはや猶予はできませんでした。

台頭してきた若い世代の筆頭は都学連グループでした。中学時代の英語教師山西英一の教え子塩川喜信(都学連委員長、五四年

東大入学や、土屋源太郎を中心にした活動家集団でした。革共同関西グループⅡ全学連中執星宮煥生のオルグもあって革共同に合流して間もないメンバーと目されていました。だが、彼等は同盟員でありながらも、加入戦術には批判的でした。闘争戦術に関してでも社会学グループにも近い立場にいました。複数の証言によれば、当時は、必ずしもセクト同盟員を演じていたわけではないということでした。明白なことは、全学連森田Ⅱ香山指導部に対して、「官僚主義的」「側近政治的」という批判のスタンスをとっていたという事実です。

また、終始、唯一、調整役を演じたのが島成郎であるとすれば、その役割に誠実な理解を示していたのが「革共同関西グループ星宮煥生」であったとは、ご本人の述懐です。この点に關しても、「島史観」との間に多少の齟齬があります。ただ、いくつかの状況証拠を知るかぎり、その「島史観」には、創立大会までの対立の事実関係に關して、過度な表現が与えられているといえるかも知れません。

さて、新党結成は最後の秒読みに入りました。

このすぐ後に到来するブント結成、革共同全学連登場という事態の急展開をはじめとした、さまざまな政治的事象は、すべて同時一体的な形をとって進行したのでした。対日本共産党中央との熾烈な党内闘争、学生党员グループ内の思惑と対立、革共同内の第一次分裂と再編、後述するような探究派内のスキヤンダルなどが、一挙に吹き出し、展開をみせるのでした。

島成郎が、ブント結成を最後に決断した時期は、警職法闘争が歴史的勝利を取った直後の一月はじめてでした。当事者が語る結成秘話です。

「この時をおいてはしないと判断、新組織創立のための全国大会招集を決めた。…人事の調整は一番の難関で最後までもみ抜いた。森田・香山を中央人事からははずせとの革共同フラクからの要求は強く調整がつかないまま大会当日まで持ち越された。…革共同フラクの強引な動きには東大・早大等が次第に警戒を強め、彼等との対決を求めてきた。」

島成郎の調整は続きました。

「相変わらずセクト争いには妥協的で、調停役に明け暮れていた。…この際、全部組織を包含してしまつたらとも考えた。…私は栗原登一らとも会つた。…実態と意見を知ることにつとめたが、その独断性に辟易し、サークルの域を出ていない状況に否定的判断を行った。…早大革共同の本多らに指導部に加わらないかと打診したが向こうから断つてきた。…もちろん、星宮らを排除する積もりはまるでなかった」(島成郎)。

◇ブント創立大会

一月二〇日、結成大会が開催されました。大会に先立って限定した参加者に「全国代表会議招請状」が発せられました。その文面が伝える末尾の集合形式から、当時の緊張感と警戒心対日共中央が伝わってきます。

学連新党結成に至る組織方針に關しても、立場の違いやズレをみせていました。島成郎は、当初から「代々木派以外の全体を結集するという方針」(富岡)を抱き続けながら、最後の新党結成段階まで、諸潮流の調整を続けました。森田実は、「日共左派や社会党左派を包含する新組織を構想」していました。星宮煥生は「反日共系左翼反対派」の連盟組織を描いていたといえます。

島成郎の自伝によれば、ブント創立大会直前のフラク内の駆け引きと対立は、四つ巴の攻防を呈していたといえます。

「一月になり、私の周辺は次第に緊迫感に包まれてきた。一刻も早く党的組織の旗揚げをせよとの要求が連日私に迫ってくる。全学連指導部を一新せよとの声も大衆的なものになってくる。…党の恫喝と統制強化も常軌を逸して襲ってくる。…森田批判が一段と高まるなかで、森田は：勤評・警職法闘争指導の中心に座るとともに東大細胞と接近しながら猛然と巻き返しをはかっていた。…星宮らは革共同フラクをつくりながら都学連の塩川・土屋・鬼塚らを巻き込んで森田派排除とフラク内多数派工作に精力的に動いていた。富岡・青木・小泉・片山らは東大・早大を基盤に全国オルグを行い主導権を握っていたが、森田とは距離をおきながらも、革共同フラクがセクト的に動くのに強く反発していた。私は相変わらずセクト争いには妥協的で調停役に明け暮れていたが、このもつとも肝腎なときに一番信頼していた生田、佐伯が不在であったことは痛手であった」

「全国の同志諸君！」

われわれがプロレタリアートの前衛として、「背教者」から自己を区別して闘争を開始しはじめてから三ヶ月以上が過ぎた。この間の階級闘争は、世界的規模でも、日本においても、この数年間になかった激烈さをもつて闘いぬかれ、プロレタリアートの偉大な戦闘力と、しかしながらスターリニズムから脱することの出来ない『前衛』の無能と裏切りとをまざまざと示している。フランスプロレタリアートの無惨な敗北を見よ！しかもこのような敗北をすら真剣に直視できない破廉恥を見よ！

九月勤評闘争、一〇月、十一月警職法闘争と、三ヶ月にわたつた九月勤評闘争、一〇月、十一月警職法闘争と、三ヶ月にわたつた日本プロレタリアートの政治闘争の偉大な発展とそこにおける社会民主主義者の決定的な裏切りの過程で、代々木官僚のしたことはなんであつたか！社民と自らを区別するものが、彼らの重要な政策において何かあつただろうか。その上彼らはブルジョアジーと共に、この間プロレタリアートの最良の同盟軍として献身的に闘つた全学連に対する攻撃を、これから全面的に強化しようとしている。

全国の同志諸君！

われわれはこの間、数限りない困難やブルジョアジーから代々木官僚に至るまでの総攻撃に直面しながら、われわれの指導下にあつた全学連の闘争をプロレタリアートの同盟軍とし

て、立派に組織した事を誇りをもって語ることができる。今や我々は、これらの経過の上になつて、明確に「代々木官僚」から分離し、さらに革命的労働者の組織と労働者大衆の獲得に公然たる闘争を開始せねばならぬ。そのため下記の要領で、全国代表者会議を開催する。

日時 二月二〇日(日)一〇時から七時

場所 東大経友会に、午前九時から九時半までに本状を持参して、連絡を受ける。場所はそのとき連絡する。必ず時間を厳守せよ。

注意 参加者は本状持参者に限る。議案は当日配布する」

ブント創立大会直前のグループ会議で内定した人事案件は、唯一、書記長・島成郎に過ぎませんでした。参加したフラクメンバー約四五名、大会議長古賀康正(東大卒)、小泉修吉(早大)。組織的に参加した細胞グループ…全学連・都学連書記局細胞、社学同中央書記局細胞、東大、北大、立命大、九大、奈良女大の各大学細胞。細胞決議を経ない有志参加校…早大、東大C、東工大、京大、中大、法大、明大、同志社大等の拠点大学細胞。参加グループの政治的区分…旧全学連グループ(森田、小島、小野寺、香山病欠、志水速雄、松田武彦)、東大本郷・駒場・社学同などのブント系細胞グループ(島、生田病欠、富岡、古賀、香村正雄、大瀬根、陶山健一、青木、清水、星野中、中村光男、鈴木啓一、野矢テツオ、篠原浩一郎、九大、小川登・京大、のち探究派・小野田猛史・向井拓治、

学連人事は、最後まで難航、…妥協人事でようやく決着する有様だった。ブントの発足は決しかつこうよいものではなかつた(島成郎)。

「全国の青年同志諸君！我々はすぐる一年もブルジョア階級との厳しい闘争にあけくれた。しかし、プロレタリア大衆の偉大な戦闘意欲にもかかわらず、また資本主義の死の苦悶にもかわらず、世界革命への道程は峻しく、また厳しい。何故なら真に革命的な指導部がどこにも存在しないからだ。…我々の意図と思想と情熱は次の文章のなかに未熟な言葉で綴られている。我々と思想を同じくし、ブルジョアジーと、彼等に死を与えるべき革命運動を毒しつづけている者達に対する、火のような憎悪に燃える同志諸君に我々は熱情をもって訴える。日本労働者階級解放の革命的前進のために我々とともに進むうではないか！」

◇学連新党の結成議案書は高らかに宣言しています。

「我々は一切の革命的空文句を拒否する。たとえ我々が正しい理論、正しい綱領をもって武装されたとしても、またそれがいくら多量のピラ、新聞の配布によって支えられようとも革命的理論を物質化する実体が存在せねば全くのナンセンスである(武器の批判は批判の武器にとって代わることは出来ぬ)。…組織の前に綱領を！行動の前に綱領を！ 全くの小ブルジョアイデオロギーにすぎない。日々生起する階級闘争の課題にこたえつつ闘

早大グループ(片山、小泉、西江孝之、加藤昇)、革共同グループ(関西派…星宮、田部学連…塩川、土屋、鬼塚豊吉、芝沼繁五、探究派…本多延嘉、白井朗、守田典彦・九大)など左翼諸潮流。

組織名は、「結成大会議案書」に「共産主義者同盟(仮称)」と記名されていた通りに決定したのですが、それにまつわるエピソードもあります。

「AGの小野田(猛史、東工大、探究派・引用者註)が『共産主義者同盟』を提案し、慌てた星宮が『この組織は過渡的組織に過ぎないのだから、名前はいつでもよい。マルクス・レーニン主義者連盟でも何でもつけておけばよい』と述べた。結局、小野田提案が多数の賛同を得た。」(島成郎)。

下記のようなエピソードもあります。

「わたしが共産主義者同盟に『日本』をつけるよう大会で提案したが、森田、小野寺、わたしの三人が賛成しただけであった。否決の理由は『スターリン主義的、民族主義的発想だ』『インターナショナルの思想性を欠いた形容矛盾だ』ということだった」(中村光男)。

結成大会開催当事者の引用を続けましょう。

「大会中、革共同は中央委員の数で対案を出すなどの陰湿な方法で迫ってきた。採決の結果両案とも過半数に達せず、二度目でわずか一票差で私の出した案が可決され、…前途多難を思わせる出立であった。私はこの大会で新党樹立を宣言、香山、森田、小野寺、星宮らとともに学連指導部を辞任したが、後任

争を組織しその実践の火の試練の中で真実の綱領を作りあげねばならぬ。…組織は真空の中では成長しない。正しい理論、正しい方針のみでは成長しない。労働者階級の闘いが生起する課題に最も労働者的に、最も階級的にこたえつつ闘争の先頭に立つて闘うことによつてその党は革命的方針を渴望する労働者に伝えることが出来る。」(「共産主義者同盟結成大会議案」二月一日)

日本の革命的左翼にとつて、別党コース…学連新党結成へ向けた決意の強さが行間から溢れています。だが、その道は決して平坦でなかつたことは既述した通りです。前門の強敵と後門の宿敵をかかえながら、峻厳な小径をよじ登る他はありませんでした。辛苦に満ちた長い道程がそのことを雄弁に物語っています。その過去が、その未来を予告していたかのようでした。とはいえ、ついに学連新党…ブント結成を成し遂げることができました。この意欲的試みは、若き共産主義者達が試みた歴史への挑戦であり、歴史的快挙といつても決して過言ではありません。六〇年安保闘争、七〇年安保・沖繩・全共闘運動へと連動した歴史の文脈で捉えかえしていくならば、日本階級闘争の歴史に自らが墨痕鮮やかに刻み込んだ「歴史の碑銘」です。この日を期して新しい管制高地への第一歩がはじまったのでした。

◆補遺1 全学連妥協人事を可能にした諸条件

ブント結成三日後に開催された全学連第一三回臨時大会で

は、懸案であった保留三役人事を確定しました。委員長塩川喜信（革共同関西派）、副委員長小島弘・加藤昇（ブント系）、書記長土屋源太郎（革共同関西派）、情宣部長青木昌彦（ブント）、書記次長清水丈夫（ブント）でした。

なお、この第一三回大会における人事交代により、五六年第九回大会で選出され、五八年第一三回大会で辞任するまで、二年六ヶ月間にわたって全学連運動を牽引した香山・森田執行部は退陣することになりました。

では、第一一回大会直前に内定していたという事実をふまえて、第一三回大会の妥協人事を成立可能にした条件とは何であつたかを、付記しておきます。

①勤評・警職法闘争の過程では、ブント・革共同関西派（特に旧都学連系）との間では致命的な亀裂は生じなかつたために、連合政権は可能であつたこと。

②当時のブント系は、ブント結成直後を含めて、革共同関西グループと拮抗状態にあつたというよりも、むしろ流動化状態にあり、組織体制を確立していなかつたこと。

③当時の革共同関西グループの党勢拡大戦略は、党派性を前面に出した探究派とは違つていた。星宮が構想した「反日共系左翼反対派」による分派結成路線であつたために、妥協を容易にしたこと。

証言は有力であり、事実と思われる）そのために、全学連第一三回大会において少数派ながら委員長・書記長・ポストを得た革共同全学連の前途は多難を強いられたのでした。

退勢に追い込まれた「ダメ押し」の要因は、闘争方針でした。当時の日共学生細胞の末端部分では、学連新党をめぐる態度を決めかねている「未定黨員」も沢山いました。党派の選択に関するかぎり星雲状態でした。このように党派状況が流動化しているなかで、急浮上したのが、全学連主流派内で起きた本格的な戦略・戦術論争です。共産同内部の論争が分派闘争という形をとって、実践領域へ波及したのでした。

新しい論争は、革共同（関西派）VS共産同（ブント派）との間で展開されました。既述した「同盟軍規定」「先駆性論」を含め、下記の「補追三」にみるような「経済主義か政治主義か」という路線論争に発展したのです。いわば、たんなるせめぎ合い段階ともいえる「抽象の領域」から、妥協を許さない行動方針Ⅱ戦略論争という「具体の領域」における、本格的な党派闘争へと移行したわけです。明らかに、論争はたんなるせめぎ合い段階ともいえる「抽象の領域」から、妥協を許さない行動方針Ⅱ戦略・戦術論争という「具体の領域」を舞台にした、本格的な党派闘争へと移行したわけです。その対立・抗争のなかで、「経済主義的路線」は退勢を強いられたのでした。

なお、二点を付記します。

①五九年革共同第二次分裂（黒田除名）によって、革共同は事

◆補追2 革共同第一次分裂と 革共同全学連第一三回大会・成立と瓦解

あの「六・一事件」の二ヶ月後、革共同は第一次分裂に見舞われました。原因は、「第四インター日本支部」に正式決定するかどうかをめぐって太田竜VS黒田寛一が対立し、太田グループが脱盟します。主に革共同中央書記局活動は、探究派グループがあとを引き継ぐことになりました。だが、運動基盤を持たない、わずか数名にも満たないサークル集団（黒田寛一、早大本多延嘉、法政大白井聡、若大広田広、埼玉大北村文彦）では、どうみても力不足です。おまけに、同じ革共同メンバーでありながら、塩川・土屋全学連（旧都学連）グループは、関西グループ直近の立場であるために、探究派の立場から首都圏学生運動を支えるには、条件が不十分でした。その結果、「機関誌発行は停止し、秋には中央は麻痺状態」；黒田も一ヶ月末には著者への手紙の中で、同盟の活動から手を引く希望を表明し、関東の組織は解体の状況（西京司）となり、やむを得ず中央書記局、機関誌活動を、京都へ移したのでした。

それに加えて、何よりも不利益をもたらした事態は、五八年七月第一次分裂のあとを追うかのように露見した「大川・黒田スパイ事件」（民青の名簿を、権力に売り渡した事件。別稿で詳述予定）でした。事件をめぐる混乱と動揺が広がるなか、五九年第二次分裂へと発展します。しかも、これら一連の出来事の推移は、ちようどブント創立大会前後とも重なつていたのでした。（この

実上三分解して、最初の連盟結成時点で立ち返つた形になりました。いわばこの「原状回復現象」は、当初の組織活動が、実際には組織内における「加入戦術」を、互いに行使し合つたも同然という、二年有余にわたる「反スタ・トロツキズム運動」の歴史を演じる結果になつた、といえるかも知れません。

②刻んできた歴史の長さを物語るエピソードの事実を一つ付記すれば、三番目に分岐した「革共同全国委創立メンバー七名中、存命は一名ということ」です。

◆補追3 革共同全学連が実現した諸条件と 瓦解した要因

革共同全学連（関西派）登場したとはいうものの、その政治的影響力は、全学連指導部周辺の活動家レベルに止まつていました。たとえ、全学連第一四回大会における「政権移行人事」が、第一三回大会成立当時からの、禅譲予定プログラムであつたとしても、革共同全学連は大衆闘争の現場においては、政治的組織的なヘゲモニーを確立することはできないまま、六〇年安保闘争を目前にして短命執行部に終わつたのでした。その背景には、ブントサイドから見れば、次のような理論・戦術路線上の問題点がありました。

五八年勤評闘争に際して、革共同（関西派）は「学生諸君が単独で一揆主義的に突っ込み、危険にさらされたとき、岡谷氏等を先頭にこれを激しく批判、建て直しをはかつた」（西京司）のでした。しかし、同じ革共同（関西派）でありながら、首都圏関西派

メンバー（旧都学連執行部グループ）は必ずしも、この抑制路線には同調しませんでした。この事実も、革共同全学連実現を可能にした「有力な条件」といえます。

では、革共同全学連が実現した後に派生した、問題点とは何でしょうか。それは「同盟軍規定」から演繹されたその「経済主義的路線」であり、これは致命的な問題点でした。

「正面の階級課題は、炭鉱の労働者管理、無償国有化、階級闘争の最有力手段は生産点ストライキ闘争である。：春闘を一大階級決戦とせよ。：労働者へのピラ入れ、工場への激励デモ、労働者の闘いの防衛の準備を組織せよ」（全学連第一三回大会・任務方針）。

このような論理に基づいて、階級課題としての労働者の反合理化闘争という「経済主義的路線」を、無媒介的に学生運動に持ち込んだのでした。この革共同全学連の論理の根底には全学連第一〇回、第一一回大会以来の「学生運動の転換」があります。この二つの大会では、平和擁護闘争から反帝実力闘争への転換の内実として、「労学同盟軍規定」を確認し、階級闘争の一端を担う労学共同性の実現という「学生運動テーゼ」ともいうべき論理を確立したのでした。ところが、その「テーゼ」から演繹すべき実践過程において、学生運動の任務を労働者階級の任務に、無媒介的に接合・従属させるという教条に陥つたのでした。当然ながら、ブント派はこれに強く反対しました。もちろん、五九年の年明け早々に岸内閣が改造され、

ちようどその頃は、五九年の年明け早々に岸内閣が改造され、くという、ブント流のダイナミックな「分峰方式」をとることはありませんでした。

黒田探究派の綱領主義と組織戦術もブント創立大会の議案書がいう、同じ「真空の中の党建設路線」でした。その特徴は、戦後主体性論争のなかの梅本克己の「倫理的主体性論」「個と全との絶対的否定的統一」を援用して「主体的唯物論」を体系化したことにあります。この黒田理論の骨格は、「プロレタリア的人間観」の自己実現と、党組織の「同心円的拡大」による建党組織論と、「永遠の今論」にみるような閉じた論理体系ともいえるべき宗派主義的前衛党論です。その延長線上に、カクマル主義（革命的マルクス主義なるものが屹立しています。このカクマル主義は、内に向けては「党のための闘い」という組織保身（温存）主義へと必然的に傾斜し、外に向けては、イデオロギー的自己純化に向自的絶対化の結果として、自己外化↓他者否定という外化を容易にします。しかも、制御体系をもたない閉じた論理は、他党派解体へと向うこと必定ではないでしょうか。

これに対して、学生運動に圧倒的ヘゲモニーをもつ日共学生黨員グループは、誰よりも歴史変革への情熱の持ち主でした。平和共存路線下にあつて、右傾化を深める公認前衛党の指導から、全学連の戦闘性を死守することを、結果的には階級闘争の一角を担うべき自己に課せられた責務と考え、その運動を担う「闘うための党」「新しい前衛党」創成をもって党組織論としたのでした。

安保条約改訂「藤山私案」が発表されたばかりであり、安保闘争が決戦前夜を迎えようといっていた時期です。

いずれにしても、安保改訂阻止闘争という政治的課題よりも、反合理化闘争・春闘をもって、学生運動の優先課題にすえるという経済主義的路線は、大衆的な支持を得ることはできませんでした。とくに、関西拠点大学の単位自治会選挙では、敗退が顕著でした。わずか半年後には、全学連の主導権をブント全学連に渡すことになりました。半年後にはブント全学連に主導権を渡すことになりました。この退勢は六〇年安保闘争終了まで続きました。全国委・探究派も、独自の政治勢力として闘争現場に登場することも困難でした。

◆補遺4 ブント主義と革共同主義

当時の反スタ・トロツキストグループは、イデオロギー的伝道集団による組織戦術を、そのまま建党組織論の基底にすえていました。

例えば、初期の一〇〇%トロツキスト＝太田派は、社会党「加入戦術」を採用していました。関西派＝西京司は、共産党「残留戦術」によって一定のカード層を獲得していたとはいえず、あくまでも個人オクルグのレベルでした。この両者はともに、組織建設はゼロ地点からスタートするほかないという歴史的制約の下で、一つの選択をしたわけです。その限りで、大衆闘争と党派闘争を直接媒介にして、既成前衛党から組織的に分岐してい

また、この建党組織論の物質化は、大衆闘争の爆発的展開を媒介にはじめて、可能であり、決してイデオロギー主義的、倫理主義的修養を説く手法の中にはあり得ないと考えました。名ばかりのスターリン主義批判や、既成前衛党への憎悪心のたぐいとも無縁の地平において、烈火の試練の中に自己実現の道を求めたのでした。そのためには、葬り去られたロシア一〇月革命の歴史的教訓の中から、あらためて忘れ去られた世界革命論を復権させ、その中から、全世界を獲得するための革命の未来を実現しようという、思想、理論、路線を構築することを遠望したのでした。

その初発の闘いは、学生運動を媒介にした小ブル急進主義による闘争でした。（根源的闘い）によって、階級闘争の血路を切り開こうと考えたのでした。一歩でも先んじた先駆的ラディカルリズムによって、階級闘争の血路を切り開こうと考えたのでした。これがブントのめざした「先駆性論」「反帝実力闘争路線」「自己犠牲と献身」であり、その極限志向が「ブント主義」、広くは「新左翼主義」の内実ではなかったかと思えます。したがって、「ブント創立」は、明日への問題提起であり、大胆な仮説でした。その後の激闘が、その仮説の実証過程であり、その過程を経て綱領の指針をこころみようとしたのでした。だが、第一次ブントは如何ほど自己実現できないままに倒壊したのでした。

参考文献目録一覽

『資料・戦後学生運動』三一書房六八年。『二・一スト前後』斎藤一郎、青木書店五六年。『戦後日本の思想』久野収、鶴見俊輔、藤田省三、勁草書房六五年。『戦後革命運動史』田川和夫、現代思潮社七〇年。『戦後文学論論争上巻』監修白井吉見、番町書房四七年。『現代日本の経済と政治』一内田謙吉、小野義彦等著、大月書店五九年。『戦後日本共産党史』小山弘健、芳賀書店六六年。『戦後学生運動史』山中明、青木書店六一年。『日本の学生運動』稲岡進、絲屋寿雄、青木書店六一年。『層としての学生運動』武井昭夫学生運動論集、スペース伽那〇五年。『激動の時代とともに』浅田光輝、情況出版〇〇年。『現代日本の学生運動』広谷俊二、青木新書六六年。『全学連意見書』四九・九。党幹部発言『全国学生細胞代表者会議報告』四八・二一。『日本教育新聞』四九・七・二三。『反戦学同第一回全国大会報告』五六・一一。『反戦学同機関誌』『反戦旗情報』五八・四、復刊第四号。『ソ同盟共産党(ボ)小史』ソ同盟中央政治局編、国民文庫五三年。『同志社の架資料集』同志社大学学友会残務処理整理委員会、〇五年。『プントの思想』二巻・責任編集 中村光男、四巻・解説 島成郎、五巻・富岡倍雄、批評社九九年。『プント私史』島成郎、批評社九九年。『六〇年安保とプントを読む』島成郎記念文集刊行会、情況出版〇二年。『プント書記長島成郎を読む』記念文集刊行会、情況出版〇二

年。『戦後史の証言・プント』批評社九九年。『新左翼理論全史』編集委員会編、流動出版七九年。『新左翼運動全史』藏田計成、流動出版七八年。神戸大細胞機関誌『神大新評論』No 4号。『学連意見書』五九・一。『現代マルクス主義』一卷、古在由重、井汲卓一、村田陽一、長洲一二、大月書店五八年。全学連第一〇回大会報告集。『クレムリンの神話』対馬忠行、実業之日本社五六六年。『世界革命の挫折』佐久間元、リベラシオン社六〇年。『黒田寛一論』小林一喜、田端書店七二年。『日本革命的共産主義者同盟小史』国際革命文庫、新時代社七七年。『日本トロツキズム運動の形成』西京司論文集、柘植書房七六年。『プロレタリア的人間の論理』黒田寛一、こぶし書房六〇年。『唯物論と主体性』梅本克巳、現代思潮社六一年。都委員会『東京党報』五七・一〇。『第七回大会党章草案』前掲五八・六号。『社会党の五〇年』安東仁兵衛、社会党機関紙局九五年。『日本共産党の五〇年』七二年版、中央委員会出版局。『全学連第一三回大会報告』五八・二二。『立命評論』唐木恭二、五八・七。『戦後革命運動論争史』小林良彰、三一書房七一年。『六〇年安保と早大學生運動』ベストブック〇三年。『プロレタリア通信』一〇・二八。『六〇年安保六人の証言』森川友義、同時代社〇五年。『戦後左翼の秘密』森田実、潮文社八〇年。立命館大学一部学生細胞意見書五八・六。『全学連書記局細胞上申書 反省と要望』五八・六。『高野秀夫とその時代』追悼集編集委員会九〇年。『塩川喜信所長特別インタビュー』上、「トロツキー研

究五〇号記念』〇七年。『共産主義運動年誌八号』(プントと革共同の歴史的関係について)白井朗、共産主義運動年誌編集委員会〇七年。『私の履歴書 人生越境ゲーム』青木昌彦、日経新聞社、〇八年。本名ペンネーム・飯島脩、津島薫、生田浩二、加藤明男、大瀬振、籙木潔、大屋史郎、西京司、沢村義雄、小野田猛史、北川登、片山迪夫、佐久間元、須貝俊、曾木晴彦、小泉修吉、芳村三郎、倉石庸、井上実、古賀康正、坂田静朋、岡田行男、佐伯秀光、山口一理、宮本健一、島成郎、熊谷信雄、白井朗、山村克、鈴木啓一、森茂、陶山健一、岸本健一、清川豊、野矢テツオ、杉田信夫(信雄)、富岡倍雄、久慈二郎、鶴嶋雪嶺、岡谷進、星宮煥生、唐木恭二、本多延嘉、武井健人、田宮健児。

年表 戦後学生運動と新左翼創成の軌跡

その源流から六〇年安保まで

作成 藏田計成

一九四五年

- 二月 ヤルタ会談(米、英、ソ、三国首脳会談)
- 八月 ポツダム宣言受諾(二四日)、天皇詔書放送(二五日)、学徒動員解除(二六日)
- 米大統領トルーマン、対日単独占領宣言、ソ連反対
- マッカーサー「日本管理方針」声明世界労連結成
- 一月 幣原内閣成立
- GHQ民主化五大改革(女性解放・組合団結権・教育の自由化・専制政治からの解放・経済民主化)
- 政治犯三〇〇〇名釈放、徳田球一、志賀義雄「人民に訴う」
- 声明、「占領軍は解放軍」と規定
- 日共機関紙「赤旗」復刊
- 第一次読売争議国際連合成立
- 一月 日本社会党、日本自由党、日本進歩党結成、日本共産

- 党第一回全国協議会
- 夕張炭坑スト
- 都下学生連合会発足
- 二月 日共第四回大会、青年共産同盟全国協議会開催
- 一九四六年

- 一月 天皇神格化否定「人間宣言」戦後の三大論争(主体性論争、技術論争、価値論争)
- 二月 第一次農地改革実施、日本農民組合結成。美唄炭坑スト。生産管理に入る
- 日共第五回大会、野坂報告Ⅱ「占領軍Ⅱ解放軍」「占領下・平和革命路線」を採択

戦後三大論争開始・先陣は主体性論争(第二の青春)荒正人『近代文学』二月号、「私は誰?」坂口安吾『新生』二・三月合併号、「文学者の責務」座談会「人間」四月号・荒、小田切、佐々木、埴谷、平野、

本多、続いて技術論争、価値論争、唯物史観論争。「民主主義科学者協会」結成

四月

- 幣原内閣打倒人民大会、デモ隊に警官ピストル発射
- 生産管理闘争に入った争議九四件、生産管理弾圧反対共闘委結成
- 衆議院総選挙、社会党進出

五月

- 第一七回メーデー(東京五〇万名、大阪一〇万名、全国一〇〇万名、一一年ぶり開催)
- 極東国際軍事裁判開廷
- 食糧メーデー(飯米獲得人民大会、二五万名参加、プラカード、天皇糾弾事件)高揚に対してマッカーサー警告「暴民デモ許さず」
- 世田谷区民「コメよこせ大会・皇居前デモ」
- 生活危機突破全国教員大会
- 第一次吉田内閣成立、第九〇回臨時帝国議会(憲法議会)開会

七月

- 総同盟結成(日本労働組合総同盟・社会党系)、産別会議結成(全日本産業別組合会議・共産党系)
- 第二次読売争議、国鉄争議

八月

- 国際学生連盟結成大会(国際学連・三九ヶ国・ブラハ)

九月

- 学生団体統一会議に七団体出席、「統一会議設置」を決定

- 一〇月 学生自治委員会連絡会開催「全国自治連」(全国学生自治会連合)へ改組(早大)第二次農地改革

二月 傾斜生産方針、政府決定

生活権確保吉田内閣打倒国民大会、五〇万名参加「学園復興要求国会デモ」早大生六〇〇〇名(戦後初の学生デモ、預金封鎖解除など決議文手交)

一九四七年

一月 吉田反動内閣打倒・危機突破国民大会、参加者三〇万名

二月 二ノ一スト中止(GHQ中止命令)

- 第一回全国国立大学学生会議開催(東大)
- 日共全国学生細胞代表者会議開催(東京)
- 全労連結成。トルーマン・ドクトリン発表
- 四月 第一回参議院選挙(二〇日)、衆議院選挙(二五日)・社会党第一党
- 五月 日本国憲法施行

六月 第二次大滝川事件記念学生祭、早大三〇〇〇名

七月 社会党片山内閣成立(社会、民主、国民協同三党連立)

一〇月 コミンフォルム設置、冷戦時代へ(共産党・労働者党情報局、欧州共産党代表者会議、五六年廃止)

早大教授大山郁夫帰国第一声「反動勢力と闘おう」

東大新人会準備会(日共東大細胞内で戦後主体性論争提起)

- 二月 国学連結成(全国国立大学学生自治会連盟・京大、一三校代表三〇名)

一九四八年

- 一月 「日本を共産主義の防波堤にする」(ロイヤル米陸軍長官)
- 二月 片山内閣総辞職、民主党芦田内閣成立(三月、社会、民主、国民協同三党連立)

「唯物史観と主体性」(座談会、世界)二月号、松村、清水、林、古在、丸山、真下、宮城)

- 四月 ソ連、ベルリン封鎖(鉄のカーテン)

- 六月 関東自治連・国学連共催「教育復興学生決起大会」(日比谷、六〇数校二万名参加、「教育復興宣言」(授業料値上げ反対、学内政治活動の自由を決議)のち、国会・文部省デモ全官公自治連結成(正式名称)全国官公立大学高専学生自治会連盟、国学連・高専連合を發展的解消)、ゼネスト決議六/二五ゼネスト、学生運動史上初の全国ゼネスト、一一四校、二〇万名)

- 九月 全学連(全日本学生自治会総連合)結成、全国一四八校、代表二五〇名(初代委員長武井昭夫、副高橋佐介、書記長高橋英典)

- 一〇月 民自党吉田第二次内閣成立
- 十一月 極東軍事裁判、七名絞首刑執行(二月)

一九五〇年

- 一月 コミンフォルム機関紙『恒久平和と人民民主主義のため』で、野坂理論を「占領下平和革命論は米帝国主義賛美の理論」と批判、これをめぐり「五〇年分裂」、主流派..所感派(臨時中央指導部)に対して反対派・国際派(全国統一委員会(宮本、春日庄)、団結(中西)、国際主義者団(野田)、統一協議会(福本)、中間派(神山))

- 二月 「沖繩永久基地化」発表(GHQ)

- 三月 日共全国グループ代表者会議で「党中央の方針批判」。都学細代、党中央と公然と論争日共全学連党員グループは党中央(所感派)に全学連意見書「最近の学生運動」を提出全学連の反イールズ・レッドパージ反対闘争下、反帝平和闘争の活動家組織「日本反戦学生同盟」(通称:A・G・J・アー・ジェー)、語源:仏語Anti Guerre アンチ・ゲール)結成の動き全国化。三月九州大支部結成(守田典彦)、五月東大支部結成、六月東京教育大支部結成、東北大イールズ講演阻止(中止)
- 四月 日共五〇年テーゼ草案
- 五月 「反帝・平和・反イールズ」自由擁護都青年学生五/一六決起大会、五〇〇〇名、集会・デモ(日比谷↓皇居前)、「日本最初の反帝デモ」(モスクワ放送・新華社電報道)

東京民主民族戦線主催「五/三〇」記念人民決起大会(労学)

日共党中央、全国学細代において「全国一斉闘争を否定的、地域人民闘争を重視」、これに対して学生党員グループは「層としての学生運動論」(全国統一スト)を対置、党中央を批判

一九四九年

- 一月 衆議院総選挙、民自党圧勝、日共三五名当選アチソン国務長官反共声明
- 三月 全学連、大学法対策全国協議会結成に参加、「国立学校設置法反対、非常事態宣言」
- 五月 全学連「大学法反対五/二四全国統一ストライキ」(二三九校、二〇万名)

日共学生細胞代表者会議「地域闘争主義の日和見主義を批判」を展開

- 六月 全学連、大学法反対ゼネスト中止
- 七月 下山事件、三鷹事件、松川事件(八月)

「日本は共産主義東進の防壁」(GHQ・マッカーサー司令官)「赤色教授とスト学生追放せよ」(CIE・イールズ教育顧問)

- 九月 西ドイツ成立

- 一〇月 中華人民共和国、東ドイツ人民共和国成立
- 十一月 イールズ反共講演(岡大、広大、阪大、京大、全学連、反イールズ・反レッドパージ闘争展開)

五万名(皇居前)

「共産党は侵略者の手先」(マッカーサー)、共産党非合法化、デモ禁止令

- 六月 三日..全学連六/三労学ゼネスト・反帝平和・労学共闘(全国四三百治会)、警視庁は集会・デモ禁止

六日..GHQは日共中央委員二四名、「アカハタ」幹部一七名を追放(七日)

- 一七日..文部次官、「学生の政治集会・デモ禁止」通達
- 二五日..朝鮮戦争勃発

二七日..日共臨時中央委「指導的学生党員三八名除名、目黒地区細胞、東大駒場細胞解散」、日共都委(全党員及び学生に訴える)「トロツキスト全学連中央追放」を発表

- 七月 レッドパージ開始(総数一一七〇名、ただし、学園キャンパスはゼロ)

総評結成(日本労働組合総評議会)

- 八月 警察予備隊七万五千名創設

日共反中央派「国際派」結成(全国統一委)。

- 九月 一月 反戦学同地方組織結成(東京都委・東海地方委・関西地方委・九州地方委二二月)

一九五一年

- 一月 警察予備隊を「防衛隊」へ切換え声明(吉田首相)
- 六月 反戦学同第一回全国協議会、組織・運動方針採択(全国委)

代表山中明二本名・富田善朗、以後、組織防衛上、役職/人名の公表は避けた。

全学連第五回大会、国際派中執二七名の学生戦線からの追放・反戦学同解散決議、立命大学細胞による「テロ・リンチ事件」発生(全学連大会参加の反戦学同盟員二名を、監禁、「帝国主義のスパイ自白、自己批判」強要)。

- 七月 朝鮮休戦会談開始
- 八月 コミンフォルム機関誌「日共四全協決議」五一年綱領支持(スターリン判決、国際派総崩れ)
- 九月 サンフランシスコ対日講和会議開催(単独講和)、対日平和条約・日米安全保障条約調印
- 一〇月 日共五全協(第五回全国協議会)、五一年綱領採択(日本は米帝国主義の従属国、中核自衛隊設置、武装闘争路線決定)

一九五二年

- 二月 東大ボロボロ事件、東大校内細胞の活動厳禁、学内パトロール警官発砲事件
- 三月 小河内村山村工作隊の早大生ら二三名逮捕
- 四月 破防法反対学ゼネスト、都学連一〇〇〇名国会デモ
- 五月 「血のメーデー」法大生近藤巨土射殺。都学連葬五〇〇名参加
- 五・三〇記念日・新宿駅東口で警官隊と衝突・学生ら一七名逮捕。早大警官侵入抗議全学集会七〇〇〇名

全学連第五回大会、所感派執行部選出、「夏休みを労働者の中で「帰郷運動」提起、国際派排除と反戦学同解散を決議(委員長玉井仁、副委員長早山正雄、書記長斉藤文治)

全学連大会へ出席した反戦学同盟員への監禁・テロ事件発生

- 六月 全学連「破防法粉砕六/一七ゼネスト」東京五〇〇〇名、京都三五〇〇名
- 七月 破防法公布
- 九月 内灘反基地闘争開始、電産・電源スト開始
- 一〇月 衆議院総選挙、自由党第四次吉田内閣成立、共産党全員落選炭労スト開始警察予備隊、保安隊の改組
- 一一月 内灘米軍演習場・妙義基地・浅間山演習場・東富士演習場反対闘争

一九五三年

- 三月 吉田内閣「バカヤロウ」解散
- ソ連首相スターリン死去
- 四月 衆議院・参議院選挙、社会党左派進出、第五次吉田内閣成立(五月)
- 六月 全学連第六回大会、反米・反吉田・反再軍備統一政府樹立をめざす運動方針採択、九七自治会(委員長阿部康時、副大橋博、松本登久男、書記長斉藤文治)
- 日共第一次総点検運動

反戦学同第三回全国委、自治庁通達(選挙権は郷里)反対決議

七月 朝鮮休戦協定調印(板門店)

カストロ、キューバ反バチスタ蜂起失敗(モンカダ襲撃)

八月 ソ連「水爆保有」を発表
第四回世界青年学生平和友好祭(アカレスト)。日本代表团、旅券要求して外務省座り込み

九月 日産自動車争議、全駐労二〇〇カ所四八時間スト
保安隊から自衛隊へ改組(戦力なき軍隊)

一〇月 ソ連共産党第一書記フルシチョフ選出
池田・ロバートソン会談

一一月 日共書記長徳田球一客死(北京、発表五五年七月)
第五回世界平和評議会総会(ウイーン)、「日本のうた」え」開催

日共全国組織防衛会議、第二次総点検運動

一九五四年

- 一月 アイゼンハワー沖縄基地無期限保有声明
アカハタ論文「平和と民主主義と生活を守る国民の統一を目指す」掲載
- 三月 日米MSA協定調印、教育二法衆院可決。防衛庁・自衛隊発足 第五福竜丸ビキニ水爆実験で被曝
- 五月 ベトナム解放軍ディエンビエンフー占領

西日本平和祭、関西学連など二万名参加(京都)

六月 周・ネル平和五原則声明

近江網糸人権争議全学連第七回大会(委員長松本登久男、副河相一成、増田誓治、書記長鮎子田耕作)、原水禁運動他二九項目の決議採択、平和友好祭、互助会運動、全学連・大山サマーキャンプ、帰郷運動(学生と労働者・農民・市民との団結を求めて)

七月 インドシナ休戦協定調印

八月 原水爆禁止署名運動全国協議会結成
九月 全学連六中委・労働市民との共闘で吉田内閣打倒・MSA再軍備徴兵反対採択

一一月 アルジェリア民族解放戦線武装蜂起
民主党結成

一九五五年

- 一月 民間六単産春闘共闘会議結成・春闘方式開始
アカハタ「極左冒険主義」を自己批判・総ての民主勢力との団結アピール
- 学生うたごえ関西ブロック結成、世界民青団代表歓迎全京都うたとおどりの会二〇〇〇名参加(立命館大)、歌おう、踊ろう、話そう会パーティー(東京理大)、学生うたごえ関西ブロック主催「地上最大の平和と友情」ピクニック

ク「奈良公園、五月」

二月 第二七回総選挙、革新野党三分の一議席確保・憲法改悪不可

三月 民主党第二次鳩山内閣成立

四月 アジア・アフリカ(バンドン)会議、平和一〇原則
第五回世界青年学生平和友好祭第一回日本準備会(衆院会館八〇名参加)

六月 全学連第八回大会、代議員二三八名を含む一一〇〇名参加、日常要求活動重視(委員長田中雄三、副増田誓治、石川博光、書記長香山健一)

七月 日共六全協(第六回全国協議会)、潜行幹部出席、階級政党から議会主義政党へ転換

八月 総評六回大会、高野実体制↓太田薫・岩井章体制へ(産別型労働運動から民同型委協体制へ路線転換)

九月 第一回原水爆禁止世界大会(通称八ノ六大会)
第一回原水爆禁止世界大会・広島アピール、社共統一組織・原水爆禁止日本協議会協結成

第一次砂川基地強制測量反対闘争

全学連第七中委、いわゆる「七中委イズム・八大路線路線」採択、「平和と友情」「身近な要求を取り上げて無数の行動を組織していけば、学生の統一ができる」「自治会サーピス機関論」「トイレに石鹸運動」「うたごえ運動」「踊ってマルクス、歌ってレーニン」

一〇月 社会党統一大会(社会党結成、委員長鈴木茂三郎、書記長浅沼甯次郎)

日本労働者解放同盟結成(トロッキズム宣伝団体・太田竜)

一二月 保守合同(自民党結成)、保革五五年体制発足
自民党第三次鳩山内閣成立

一二月 小選挙区制(トマンダー)、参議院で審議未了・廃案
反戦学同第七回拡大全国委「反戦学同は全学連運動強化のための平和活動家組織」と規定

一九五六年

一月 自民党、国立大学教授料値上げで一致、

全学連中執「国立大学教授料値上げ反対」声明、反対闘争を契機に、学生運動再建

二月 ソ連共産党第二〇回大会「フルシチョフ秘密報告」(スターリン個人崇拜批判、集団指導体制、米ソ平和共存路線を提起、六月アメリカ国務省暴露)

国立大学教授料値上げ反対都学生決起大会、二年ぶり統一行動実現、東大教養二五〇〇名他、全都四〇〇〇名
コミソフォルム解散

四月 衆院本会議、新教委法めぐり乱闘、暁の国会で可決(六月公布)

五月 米、最初の水爆投下実験

全学連「原水爆実験・小選挙区制・教育三法反対第二波

統一行動」二万名参加、日比谷野音
全学連・日本文化人会議共催集會、後援は総評、日教組、早大教授四八名が支持メッセージ
ポーランド暴動。

六月 全学連第九回大会、六〇〇名参加、「七中委イズム・八大路線」の否定、「八中委・九大回路線」の確立、新たなスローガン「平和と民主主義、より良き学生生活のために」(「奇跡の再建」「第二創成期」、委員長香山健一、副星宮煥生、牧衷、書記長高野秀夫)、総評、日教組との協力関係確認、

七月 エジプト・ナセル、スエズ運河国有化宣言、英仏出兵
プライス勧告反対「沖繩二〇万名デモ」

「もはや戦後ではない」(経済白書、高度経済成長の出発宣言)

九月 全学連九中委、平和擁護闘争推進、原水爆反対署名
二〇万人、カンパ一〇〇万円突破、帰郷運動展開

一〇月 ハンガリー暴動、ソ連軍介入
第二次砂川闘争、全学連三三〇〇〇名を先頭に阻止闘争、警官二〇〇〇名と激突、労働学はスクラムで測量阻止(負傷者七三〇名、逮捕者一名、警官一名自殺)、政府決定「砂川測量打ち切り」、砂川闘争勝利!

一二月 愛媛県教委「勤務評定」実施決定、阻止闘争開始
国労、合理化反対実力阻止決定

大二万五千名参加、来賓挨拶・原水協、砂川反対同盟、沖繩社

大党、社会党、共産党宮本顕治、日教組、東京地評、早大教授、メッセージ・国際学連、総評、全通、全専売、日高教、国税東京、共同印刷、砂川町長、愛大校長、教育大教授、明大文学部教授会等、社会的諸階層から全学連に絶大な支持、連帯、期待集まる

全学連との統一を控えた夜学連の集会(夜間学部自治会連合六〇〇〇名参加)

六月

反戦学同第二回全国大会(原子戦争準備反対・平和擁護闘争決議、「七月戦争危機説」提起、後撤回(全国委員長中村光男、副委員長鈴木迪也、書記長鈴木啓一))

岸渡米、日米新時代声明

九月

第三次砂川基地拡張実力阻止、泊まり込み、現地闘争。国鉄新潟闘争

全学連第一〇回大会、平和擁護闘争路線提起(委員長香山健一、副小島弘、桜田健介、書記長小野寺正臣)

原子戦争準備反対・原水爆実験禁止協定即時無条件締結要求全日本学生総決起デー、全国二八都市、七万名原水爆実験反対・砂川不当弾圧反対国民大会、労学一万名日比谷

「日共党章草案」発表・高度に発達した資本主義国でありながら、アメリカ帝国主義に支配された事実上の従属国(民族民主革命論、二つの敵論、二段階革命論)

授業放棄、学内集会、街頭署名で参加、中央集会(日比谷野音、学生一万六千名含む二万二千人参加、東京駅までデモ)

全学連第一四回中委で反執行部派Ⅱ党中央系二中執(早大、神戸大罷免、砂川闘争の戦術総括、「ジグザグデモ」へビ踊り)是非論争、「ストライキか、授業放棄か」等をめぐる戦術上の対立が表面化

夜学連第八回中委「全学連への組織統一」を決定

反戦学同第三回全国大会、「七月戦争危機説」を自己批判、全国一〇二支部、同盟員数一〇〇〇名(全国委員長中村光男、副委員長鈴木迪也、書記長鈴木啓一)。

『反戦旗情報』復刊第一号(反戦学同全国執行委員会教宣部執筆 中村光男、清水丈夫、武田秀郎)

一二月 日教組臨時大会、勤評非常時宣言

「アカハタ」一九五七年をふりかえるで、学生戦線の拡大強化の発展を評価

トロツキスト連盟、「日本革命的共産主義者同盟」へ改称、機関紙「世界革命」

日共党中央書記局学対会議「東欧暴動の学生の行動は反幹部・反革命的。同じように日本学生党員は反中央にみちており、対策が必要」(袴田常幹発言)

一〇月

ソ連人工衛星第一号「スプートニク」、軍事優位を誇示。毛沢東訪ソ「東風は西風を圧す」と、フルシチョフの平和共存路線批判、中ソ対立顕在化。アルジェリア民族解放戦線(FLN)軍事行動開始

日共革新派「党章総綱がアメリカ独占資本の権力という亡霊にしがみつき、これを過大評価する保守主義の間違いを犯している。日本で国家権力を握っているのは、日本の占資本だと考えている。したがってこれを打倒する社会主義革命が、わが国の唯一の革命である」と考える。

しかし、当面すぐさま社会主義革命のための直接的闘争をやるうとは考えない。当面の闘いとしては、構造的改良を中心とする平和と独立と民主主義と生活上をめざす革命的改良の闘いを考える。民族の完全独立は、この革命的改良の闘いのなかで、またその一つとして貫徹される(「東京党報」二〇・三〇日号)

十一月

「一」一原水爆実験禁止国際統一行動デー、世界三〇ヶ国、日本一〇〇都市八〇万名参加

全国六九都市、八一校、一八八自治会、四〇万名、スト、

一九五八年

一月

日共東大細胞機関誌は「マルクス・レーニン主義」九号、山口一理論文「一〇月革命の道とわれわれの道」、禁句なスローガン「プロレタリア世界革命万歳!」掲載

二月

津島論文「最近における学生運動について」(前衛)ソ連、核実験の一方的停止宣言、軍事的優位を誇示

三月

全学連一六中委、主流派と反主流派の対立激化

総評・原水禁・全学連共催「エニウエトック実験阻止・原水爆基地化反対国民大会」(労学一万名(日比谷野音)全学連「エニウエトック水爆実験阻止・勤評粉砕全国第一波決起大会」全国三七都市一〇万名、東京三〇〇〇名米大使館・文部省抗議デモ(清水谷公園)

四月

勤評粉砕・全日本青年学生共闘会議結成、六団体(全学連、民青、全青婦、総評青婦協、社会党青年部、全日農青年部準備会)全学連「水爆実験阻止・勤評粉砕全国第二波決起大会」全国五九都市、五七校、一一六自治会、三〇万名スト・授業放棄、東京八〇〇〇名参加、防衛庁、文部省、米英大使館デモ。夜学連二〇〇〇名、夜間デモ禁止令を衝いて有楽町デモ決行

五月

反戦学同第四回全国大会、「社会主義学生同盟」へ改組、

從學連第一回因委公委員參加者光榮(副委員長長鏡謙賢)評議罷
長鏡(左)帝國主義政策粉碎、學生運動先駆性論、労学同盟軍規定、
平和擁護闘争強化(反帝実力闘争路線)採択。反主流派「平和
共存路線、社会主義優位論(金環論)」を対置、一時混乱委
員長香山健一、副・小島弘、佐野茂樹、書記長小野寺正臣

六月

一日「六ノ一事件」全学連大会に参加した約一四〇名の党員
代議員グループ会議が、党本部会議室で開催、全学連第
一回大会における「党中央党幹部の不当介入への糾
弾」に際して、本部役員と偶発的に衝突、これを契機に
党中央と学生党員との対立激化、大量除名、「学連新党結
成」へ

四日「党中央声明発表」一部悪質分子と反党的思想粉碎
七日「日共都委員会(反中央派)」「全学連問題で予断を持つてはな
らない」と強調

一日「全学連書記局細胞、党中央へ」「上申書」(事件への反省と
要望)

一七日「日共第一次処分」一六名

二三日「党中央書記局」「全学連グループの規律違反行為及び若
干の事実について」(アカハタ)。日共立命館大学生細胞「意
見書」

七月 勤評阻止闘争激化、高知、和歌山、奈良、福島県教組

一〇 割休暇闘争、現地オルグ団派遣

一三日「アカハタ」は「学生運動にもぐりこんだ挑発者」とたた
かえと、法政大細胞ビラ批判

二二日「警職法審議未了(奇妙な勝利・全学連)
三〇日「京都府党報号外」は「立命館大細胞のトロツキスト集
団の破壊工作」と批判

二月

三日「日共第三次処分(四七名)」。日共関東大学生細胞解散決議
一〇日「学連新党(共産主義者同盟(アント)」結成

二二日「日共幹部会論文」「学生運動における党活動の問題点」
(アカハタ)
全学連第一三回臨時大会、革共同関西派系が主導(委員長
塩川喜信、副小島弘、加藤昇、書記長土屋源太郎、次長清水丈夫)
社会学同第三回全国大会、決議「全学連の転換評価、安保
改訂反対、勤評阻止、日共中央の学生運動弾圧と闘う」(委
員長・陶山健一、書記長・多田靖)、社会学同「理論戦線」第二号
(発行所・リベラシオン社、執筆・森茂、熊谷信雄、島成郎、姫岡
玲治、青木昌彦ほか)

一九五九年

一月 キューバ革命

日米安保条約改定藤山試案発表
全学連書記局細胞意見書「日本共産党の危機と学生運動」
トロツキスト同志会、「国際主義共産党」に改称

日共第七回大会、党章草案を継続討議
日共学生細胞第二次処分(九名)

日共学生党員グループ、フラクシオン結成
革共同第一次分裂、トロツキスト同志会結成(トロ同・太
田派)

八月

社会学同第二回臨時全国大会(委員長・陶山健一、書記長・清水
丈夫)

九月

社会学同理論機関誌『理論戦線』創刊(書記局・目黒区駒場東大
駒場寮・服部信司気付、執筆・熊谷信雄、島成郎、清水丈夫、花
村一司、山川和夫、小野田猛史、杉田信夫)

九月

全学連第一二回大会「勤評闘争を徹底した非妥協的政治
闘争として闘う」(実力闘争路線の確認、委員長香山健一、副小
島弘、佐野茂樹、書記長小野寺正臣)学生党員グループ・フラ
ク機関誌『プロレタリア通信』創刊

一〇月 日共青学部「学生運動の極左的傾向と学生党員の問題」
問題(アカハタ)

警職法阻止青年学生連絡会議、二五団体

警職法阻止全国総決起集会、労学四万五千名、学生二万
名(四谷外堀公園)

十一月

五日「警職法反対統一行動、国労・私鉄スト、全国四五〇万名
参加、全学連全国ゼネスト、スト支援、東京・労学一万
名集会デモ

三月

安保条約改定阻止国民会議結成(中央幹事二三団体・総評
社会党、中立労連、全日農、原水協、平和委、基地連、日中国交
回復、日中友好、青年学生共闘会議)全学連所屬、共産党オブザー
バー参加

共産党第一回全国学代で、四インター加盟結論出ず、
革共同グループ排除決定
砂川闘争伊達判決(日米安保・憲法違反)

四月

安保改訂阻止国民会議第一次統一行動
安保改訂反対青年学生共闘会議結成(社会党青年部、民青
総評青対部、全日農青年部、全学連)

日共青対部論文「学生運動におけるトロツキスト極左日
和見主義粉碎のために」(アカハタ)

六月

社会学同第四回大会、ブント系執行部選出(委員長篠原浩一郎、
副委員長山田恭輝、同書記長藤原慶久、革共同関西派系同盟員、
「社会学同左翼反対派」結成、機関紙「ボルシェヴィキ」創刊
全学連第一四回大会ブント系主導権確立、反帝反安保・
実力阻止闘争路線採択(委員長唐牛健太郎、副鎌谷秀剛、加藤昇、
書記長清水丈夫)

国際主義共産党解党(トロ同)、のち「第四インター日本委」
改称

日共第六中総決議、「現代の理論」をやり玉に、「理論と実
践の統一」に反するだけでなく、マルクス・レーニン主義

党の組織原則に規律に反している。誤りの本質は、組織原則に対する修正主義的歪曲である」(アカハタ八〇七、第五号・九月で廃刊)

八月

中ソ対立激化

革共同第二次分裂、探究Ⅱ黒田派「革共同全国委員会」結成、学生組織「マルクス主義学生同盟」、機関紙

「前進」創刊、「大川・黒田スパイ事件」

九月

黒いジェット機不時着事件、(米軍)二機、藤沢飛行場第四回都党会議、主流Ⅱ党派派は「自由主義的分散主義的偏向、規律違反」を口実に、委員資格剥奪、立候補を断念させ、春日正一委員長以下の執行部主導権奪権、首都の革新派は二〇%へと大幅後退

一〇月

都学連第一二回臨時大会(七月流金)で、首都圏のブント系主導権を確立(委員長糠谷秀剛)、安保改訂阻止・岸内閣打倒全国学生総決起集会(日比谷野音)に一万名参加、外務省・防衛庁デモ、夜間部学生二〇〇〇名新橋までデモ
全学連・都学連書記局長委員唐生健太郎、副委員長・都学連委員長兼任糠谷秀剛、書記長清水丈夫、情宣部長青木昌彦、労対部長小島弘、国際部長志水速雄、財政部長東原吉伸、都学連副委員長蔵田計成、書記長永見亮、執行委員林紘義、立川美彦、田中一行、田中学、宮脇則夫、神保誠、高校対策部長加藤幹雄、社会学委員長篠原浩一郎、副委員長山田恭暉、同書記須藤絢子等一九

名

一一月

一七日…都学連通達「一一/二七国会突入で物騒然たる混乱を導き出し、岸・藤山をわれわれの前に引きずり出せ」

二五日…東京地評左派グループと全学連合同フラクション、「警官の阻止線突破、全員請願デモ実現」をめざして、精鋭デモ隊の配置等を密議、全学連は「構内突入」(座り込み)を主張

二七日…国民会議第八次統一行動、全学連安保改訂阻止全国ゼネスト「一一/二七国会構内大抗議集会」(労学市民

二万五千名、三方向から国会包囲デモ。チャペルセンター前特

許庁前で、警官の阻止線を突破、国会正門で野次馬四名が正門カンヌギを開けてデモ隊を誘導、一部は植え込みから構内に侵入「全員請願」「国会構内抗議集会」を実現。翌日から全学連弾効の集中砲火

二八日…東大教養学部自治会選挙「投票差し替え事件」、主流派

委員長選出

一二月

一〇日…全学連は集中砲火にひるまず「一二・一〇国会構内大抗議集会」決定したが、当日、日比谷野音控室で「自治会代表者会議」、激論のすえ国会デモ中止↓銀座デモ(日共系反主流派が参加した最後の全学連統一行動デモ、清水丈夫・葉山岳夫、東大籠城)

二五日…国民会議全国代表者会議の圧倒的多数、「ゼネストを基礎に、一一/二六岸渡米羽田実力阻止を」

二六日…国民会議幹事会、「羽田動員方針を、少数派Ⅱ二団体(総評・共産党)の主張で中止を決定、他の一二幹事団体は不同意。取り決めた方針は「一四日、全国的抗議集会、都内(文京公会堂)で抗議団結成大会、一六日午後三時半、渡米調印反対全国集会(日比谷野音)」

一九六〇年

一月

六日…日米新安保改訂交渉妥結

一〇日…東京共闘会議(出席七団体)、「一二日に一一/一六羽田抗議集会実行委結成」申し合わせたが、切崩され瓦解

一二日…警視庁三井公安一課長、全学連書記局に「羽田闘争を思いとどまるように」説得書を手交

一四日…渡米調印反対・抗議団結成大会、地方代表含め二〇〇〇名参加、紛糾裏に議事打ち切り、翌日、地方代表団二五〇名、総評事務局に抗議

一六日…渡米調印全権団、早朝出発、警官隊六〇〇〇名配置。全学連「一一・一六羽田空港ロビー占拠闘争」、七〇〇名籠城、七六名逮捕、空港周辺では全学連主流派主体に労学市民三〇〇〇名、徹夜抗議、外電は「ゼンガクレン」「赤いカミナリ族」として世界に報道国民会議第一二次

統一行動、都内五カ所から、求心デモで日比谷野音に

集合、「岸渡米・日米新安保調印抗議集会」には、地方代表三〇〇〇名を含む二万数千名が参加、全学連は「羽田闘争報告」を主催者に要求したが拒否され、壇上で抗議、マイクのスイッチが切られ、集会は中止

二二日…全学連反主流派・都内九大学一四自治会声明「羽田闘争は極左はねあがり、国民会議の統制に従え」

二五日…三池炭坑労組全面無期限スト・会社側全山ロックアウト(久保山清暴力団に刺殺・三月)

二月

日共細胞長崎地区委二名除名、離党グループ「長崎社研」

結成「諸組織への要望」(阿部知二、石川達三、家永三郎、亀井勝一郎、清水幾太郎、中野好夫、務台理作等七名、闘争指導部と大衆とのギャップを指摘し、「…をするな」ではなくて「…をしよう」としなければ「全国的エネルギーが…空しく四散してしまふ」と、懸念を表明 社会学同

第五回全国大会、左翼反対派八名代議員資格否認、途中退場(委員長篠原浩一郎、副委員長山田恭暉、書記長藤原慶久 社青同(準)全国学生班協議会準備会発足

三月

日共港地区委、共産同へ合流

全学連第一五回臨時大会、革共同関西西派八中執罷免・反主流派ポイコット

四月

社会党非常事態宣言

共産同第四回臨時大会、「四／二六全学連ゼネスト、国会

包囲により労働者階級の決起を促し、同盟の存亡を賭けて闘う」、「羽田事件総評弁護団」解散声明

全学連全国八二大学、集会・デモ、首都圏主流派、「四／二六国会チャペルセンター前・パリケード突破闘争にブ

ント系労働者含め七〇〇〇名、うち二〇〇〇名パリケード突破も、闘争不発。全自連⇨反主流派一万一千名、清水谷集会、国会請願デモ（主流派から「お焼香デモ」と批判）。

都自連結成（都自治会連絡会議、日共系全学連反主流・構改派主導）。共同全国委系マル学同第一回都同盟員総会韓国民

衆決起五〇万名デモ、韓国李承晩退陣。トルコ学生反政府デモ

五月
二日：全学連「五／一三国会構内抗議集会」中止、「国会正門前抗議集会」へ方針変更

四日：全学連、青学共闘から離脱勧告

九日：北京、日米軍事同盟反対日本人民支援一二〇万人デモ

一三日：全学連「安保改訂阻止全国総決起国会正門前抗議集会」（日比谷野音に四〇〇〇名、中央集集に合流、東京駅までデモ、京都五〇〇〇名参加・デモ向山公園）

一四日：国民会議第一六次統一行動、全自連五五〇〇名、清水谷公園で集会、国会請願デモ、夜間部学生一〇〇〇名と日比谷野音で合流、三池闘争支援・三井本社抗議デモ、

社会党発表「請願署名一三五〇万」

一五日：全学連第二四回臨時中央委（明大、五／二六国会包囲デモ、労働者階級のゼネスト・国会包囲デモ・都自連解散・分裂行動自己批判を決議

一九日：衆議院安保特別委で自民党採決強行。警官導入して野党議員ごぼう抜き、右翼団体多数傍聴、本会議開会、会期延長を議決。二〇日未明、新安保条約・行政協定強

行採決（二〇日後に自然成立）全学連「非常事態宣言」、国民会議の緊急動員に呼応五〇〇〇名、午前三時半まで国会包囲デモ

二〇日：全学連全国スト、主流派一万名国会包囲デモ、労働者一五〇〇名参加、自民党本部・首相官邸・南平台公邸突入、労学一二名逮捕、主流派一万三千名清水谷集会、国会を経て銀座デモ

二四日：学者文化人三〇〇名国会デモ。各界抗議声明「強行採決反対」「岸退陣」「国会解散」「議会民主主義を守れ」

二六日：安保改訂阻止国民会議第一六次統一行動、一七万人国会包囲デモ、全学連主流派一万名、終日ジグザグデモ、反主流派一万五千名、日比谷野音⇨国会⇨銀座⇨デモ岸首相記者会見「声なき声に耳を傾ける」。「声なき声の会」呼びかけのデモ隊列に三〇〇名。「民学研」（民主主義を守る全国学者研究者の会）発足。香山健一・森田実「労働運動研究会」設立

六月

三日：全学連主流派一五〇〇名、首相官邸突入一二〇名負傷、一三名逮捕、夜間部学生二〇〇〇名合流、「ゼネスト支援全都総決起大会」（日比谷野音・銀座デモ。反主流派都自連「スト支援中央学生集会」、一万二千名参加（高校生一五〇〇名、清水谷⇨銀座デモ）

四日：国民会議第一七次統一行動、全国五六〇万名参加、国労働者の「六／四ゼネスト」、商店二万スト閉店、全学連主流派三〇〇〇名、反主流派都自連七〇〇〇名、スト支援一〇日：「ハガチー来日阻止羽田闘争」（ハガチー事件）⇨米大統領新聞係秘書ハガチーの車列を、羽田空港内デモ隊一万名（都自連学生三五〇〇）が包囲、ヘリコプターで脱出

一一日：第二メーデー、国民会議二二万名国会包囲デモ、全学連主流派五〇〇〇名、岸・ハガチー会谈阻止首相公邸デモ、反主流派一万名、神宮絵画館前に集合⇨国会⇨米大使館デモ

一五日：全学連主流派「国会構内突入闘争」、午後五時、南通用門に一万七千名結集、同七時、一五〇〇名突入機動隊

第一次襲撃・樺美智子死亡、同八時、三〇〇〇名再突入、虐殺抗議集会、同一〇時、第二次襲撃、午前〇時、第三次襲撃、負傷者一〇〇〇名余、逮捕者一七四名。都自連一万五千名、神宮絵画館前⇨国会⇨警視庁前座り込み、「学生死亡」の報も、八重洲口流れ解散、一部国会へ。右

翼、反主流派新劇人デモ襲撃

一六日：臨時閣議「米大統領アイゼンハワー訪日延期」。東大茅学長が学生擁護声明、松田文相、声明非難

一七日：全国各地で抗議デモ。新聞七社共同声明「暴力を排し議会主義を守れ」。国大協「学生の行動に遺憾の意」表明

一八日：樺美智子虐殺抗議・岸内閣打倒総決起大会（二万名日比谷、三三万名国会包囲デモ、国会前周辺徹夜、労学市民四万名座り込み、午前〇時、新安保条約自然成立

二二日：犠牲者を出した責任はトロツキスト指導部にある（アカハタ）

二三日：樺美智子全学連追悼集会三〇〇〇名（日比谷公会堂、三〇〇名が日共本部抗議デモ安保条約批准書交換、岸首相退陣表明

七月 二日：安保改訂阻止国民会議第二〇次統一行動、三宅坂一〇万名、安保改訂阻止闘争終息

四日：全学連第一六回大会、「一定の勝利と大きな挫折」と総括、都自連・各共同関西派系は「都自連解散要求の撤回」「八

中執罷免取り消し」を要求し、拒否されたために大会ボイコット（委員長唐牛健太郎、副加藤昇、西部邁、書記長北小路敏）全自連結成（反主流派・全国学生自治会連絡会議議長黒羽

純久、社学同左翼反対派第一回全国大会

一五日：池田内閣成立（所得倍増）

二二日：全学連、三池闘争支援に三五〇名、三池ホッパー前

一〇万名集会

二二日…全学連救対部、全自連非難声明「六/一五救援カンパを上納せず」

二九日…共産同第五回大会で政治局解体露呈、東大意見書提出、分派闘争、同盟解体

八月 共産同全国学生細胞代表者会議、政治局員を追放、臨時政治局員を学生で構成(再建準備委)「さしあたってこれだけは」発表(谷川雁、関根弘、武井昭夫、鶴見俊輔、藤田省三、吉本隆明)

九月 炭労臨時大会、中労委幹旋案を条件付で受諾、三池闘争收拾革通派(東大II早大フラク)結成を決定、機関紙「革命の通達」参加…服部、星野、長崎、藏田、下山)プロ通派結成、東大II早大フラクに対抗(機関誌「プロレタリア通信」、学連書記局一名除き全員参加)

一〇月 戦旗派結成一一日、(機関誌「戦旗」に掲載、戦旗は結成の基本的立脚点)発表三〇日、共産同労対グループ(都学連第一三回大会、妥協人事II革通派(委員長)VSプロ通派(書記長)仲介・妥協ならず、衝突流血主流派「池田治安内閣打倒全学連集会」五〇〇名(日比谷野音、革通派が現場主導)主流派「池田内閣打倒全学連統一行動」中央集会「五五〇名(日比谷野音、革通派現場主導)

社会党浅沼委員長、右翼少年に刺殺(日比谷公会堂)

一一月 総選挙(自民二九六、社会一四五)社学同左翼反対派(革共同

関西派)、国際主義共産青年同盟(進)学生部へ改称

一二月 第七回全国教育系学生ゼミ開催(静大)、参加三五〇〇名、道徳教育科目開講阻止闘争拠点五校決定社青同学生班協議会結成大会(社会党系)

一九六一年

一月 革命的労働者の全国交流会議(博多交流会議)開催、長船社研・大正炭坑共産主義同志会(共催、参加…共産同各派、革共同全国委、同関西派、労働運動研究所(長谷川浩)、渥美新民主主義研究会(杉浦民立)等、情報交換に終わる。共産同全国学組代(東大駒場寮)マル青労働(日本マルクス主義青年労働者同盟・革共同全国委)結成

二月 新島ミサイル反基地闘争激化共産同全国労働者組代、大会開催を申し合わせたが立ち消え。「戦旗」青山論文掲載、「革命的戦旗派」結成、全国委との統一アピール。プロ通派解散、一部全国委合流、林紘義等「共産主義の旗」派結成

三月 全自連第五回全国代表者会議、一〇五自治会三五〇名参加、新島オルグ団強化、連絡機関から闘う組織へ

四月 全学連第七回拡大中委、唐牛委員長の自己批判的総括、篠原社学同委員長の社学同解散・マル学同への結集宣言。「反帝反スタ・革命的學生運動路線」確立、共産同機関紙『戦旗』五三号で廃刊

五月 政暴法(政治的暴力行為防止法)衆議院提出ケネディ大統領ベトナム派兵決定。

六月 革共同全国委第四回全国代表者会議、共学同(共産主義学生同盟)事件で関係者自己批判

七月 全学連第一七回大会・マル学同vs社学同(IIつるや連合)、マル学同がゲバ棒初使用

八月 社学同再建委員会(主要メンバ…中村光男、古賀泉、河野靖好、山崎修太、福地茂樹、星山保雄)機関紙「希望」創刊、次いで『SECT No.6』発行

年表 反戦学同／社学同

作成
藏田計成
協力
中村光男

代表山申明(本名富田善朗、以後、組織防衛上、役職/人名の公表は避けた)

五〇年

三月 全学連の反イールズ・レッドバージ反対闘争下、反帝平和闘争の活動家組織「日本反戦学生同盟」(通称:A・GⅡアー・ジェー、語源:仏語 Anti-Guerre アンチ・ゲール) 結成の動き全国化

三月 九州大支部結成(守田典彦)、五月東大支部結成、六月東京教育大支部結成

十一月 反戦学同東海地方委、一二月東京都委・関西地方委・九州地方委結成

五一年

六月 反戦学同第一回全国協議会、組織・運動方針採択(全国委

八月 反戦学同全国準備委第二回全体会議
一二月 反戦学同準備委臨時総会、新常任委選出

五二年

六月 全学連第五回大会で、国際派中執二十七名の学生戦線からの追放・反戦学同解散決議、立命大学細胞による「テロ・リンチ事件」発生(全学連大会参加の反戦学同盟員二名を、監禁、「帝国主義のスパイ自白、自己批判」強要)

五三年

三月 反戦学同第二回拡大全国委

六月 反戦学同第三回全国委、自治庁通達(選挙権は郷里)反対決議

五四年

三月 反戦学同第四回全国委

十一月 反戦学同第五回全国委

五五年

九月 全学連第七回中央委員会(名古屋)、「七中委イズム、八大会路線」を採択(政治闘争否定、自治会は学生日常生活要求をくみ上げる機関「自治会サービス機関」「トイレに石鹸運動路線」。反戦学同代表挨拶。反戦学同、日共中央と全学連中執委に抗議、「全学連第五回大会における反戦学同解散決議、テロ・リンチ事件にたいして」)

一二月 日共中央、「反戦学同へのテロ・リンチ事件」を自己批判。反戦学同第七回拡大全国委(アビール・全学連運動再建強化のための平和活動家集団と自己規定)年末から五六年一月にかけて、東大Cを先頭に国立大学授業料反対闘争が盛り上がる。各地で反戦学同支部の再建が進む

五六年

一月 『反戦学生同盟の歴史的任務と今後の課題』(東京都委員会)
六月 反戦学同第八回拡大全国委

一二月 反戦学同第一回全国大会(国鉄運賃値上げ反対、桑港体制打破等を決議(委員長中村光男、副委員長鈴木迪也、書記長・鈴木啓一、森茂、常任執行委員・東京都委員・中心的メンバー・樋口滋、吉田宏哲、大西健三、山下米子、小野田猛史、吉沢弘久、白井朗、山口昌宏、太田雄二、田村、峰岸、小泉、等々力、塩川喜信、南、伊藤、高浜、別格・野矢テツオ、書記局・大塚窪町(東京教育大のサークル部室)

五七年

三月 反戦学同第九回全国委(全国総計三三支部、同盟員数四一〇名。組織メンバー:東京教育大二三名、東大本郷三九、東大〇二五、東京学芸大一一、東工大一一、中央大二五、法政大一五、明大三七、日大五、武蔵美大二〇、女子美四、衛生短大三、早大、都立大、日本医大、日比谷高三、青山高三。地方推定:横国大五、名大二〇、立命館大三〇、同志社二〇、大阪市太二〇、大阪外大五、神戸大二〇、新潟大二〇、山口大一〇、愛媛大五、九大二〇、豊岡高五)

五月 反戦学同第二回全国大会(原子戦争準備反対・平和擁護闘争を決議、野矢テツオ「七月戦争危機説」提起、後撤回(全国委員長中村光男、副委員長鈴木迪也、書記長鈴木啓一)
一二月 『反戦旗情報』復刊第一号(反戦学同全国執行委員会教宣部責任編集・執筆:中村光男、清水丈夫、武田秀郎)

反戦学同第三回全国大会、組織拡大、(全国一〇二支部、同盟員数約一〇〇〇名。高校増加組織部長…多田靖、島田小西、石田、香村、井上らが指導部に) 反戦学同書記局細胞意見書(二・一・一原水爆禁止国際統一行動デーを巡る、対日共中央批判)

二月 『反戦旗情報』復刊第二号(執筆…鈴木啓一、杉田信雄、中村光男ほか)

五八年

一月 『反戦旗情報』復刊第三号(執筆…鈴木道成、杉田信雄、鈴木啓一ほか)

三月 『反戦学同第一一回全国委員会、社学同への転換を決議』

四月 日本反戦学生同盟第一一回全国委員会、「全同盟員、学生活動家諸君へのよびかけ」——「反帝平和の光栄ある伝統を継承しつつ全同盟の革命的力量をあますところなく結集して社会主義学生同盟への画期的発展を勝ち取れ!」『反戦旗情報』復刊第四号執筆…清水丈夫、香村正雄、鈴木啓一書記局…文京区本富士町(東大文学部学友会気付)

五月 『反戦学同第四回全国大会、「社会主義学生同盟」へ改組、社学同第一回大会(委員長…中村光男、副委員長…鈴木啓一、書記長…清水丈夫。「六」一事件)以後、森田、生田、古賀、中村ら、党文京地区委員会、反中央分派闘争開始。』

八月 『社学同第二回臨時全国大会(委員長…陶山健一、書記長…清

水丈夫。』

九月

『社学同理論機関誌』『理論戦線』創刊(書記局…目黒区駒場、東大駒場寮・服部信司気付、執筆…熊谷信雄、島成郎、清水丈夫、花村一司、山川和夫、小野田猛史、杉田信夫)

二月 共産主義者同盟結成大会…二二/一〇、社学同…中村

光男、鈴木啓一、多田靖、小野田猛史参加社学同第三回全国大会、決議「全学連の転換評価、安保改訂反対・動評阻止、日共中央の学生運動弾圧と闘う」(委員長…陶山健一、書記長…多田靖) 社学同『理論戦線』第二号(発行所…リベラシオン社、執筆…森茂、熊谷信雄、姫岡玲治)

五九年

六月 『社学同第四回全国大会主流派執行部確立(委員長大瀬振、副平井吉夫、書記長…革共同関西派系)』社学同左翼反対派「結成、機関紙『ボルシェヴィキ』創刊

社学同『理論戦線』第三号(発行所…リベラシオン社、執筆…岸本健一、戸坂出、姫岡玲治、熊谷信雄、大瀬振)

二月 国会デモ(二二/二七)

二月 『社学同『理論戦線』第四号(執筆…高田堯、金沢大学支部、大瀬振、熊谷信雄)』

六〇年

一月 岸渡米阻止羽田闘争(逮捕者七六名)

二月 『社学同第五回大会、左翼反対派八名代議員資格否認、途中退場(委員長篠原浩一郎、副委員長山田恭暉書記長藤原慶久)』

三月 『全学連第一五回臨時全国大会、日共/革共同系を排除、プリント/社学同の指導権確立』

四月 『社学同『理論戦線』第五号(発行所…リベラシオン社、執筆…真樹朗、白岳徹、プリント第四回全国大会、国会正門前デモ(四二/二六)』

六月 国会デモ・南門突入(六/一五)

七月 『全学連第一六回大会(委員長…唐牛、副委員長加藤、西部、書記長北小路、全学連三五〇名三池炭鉱闘争派遣(総指揮…藤原慶久、プリント第五回全国大会、解体、革通派、プロ通派、戦旗派へ三分解)』

六一年

三月 『犯罪者同盟結成(平岡正明、宮原安春、諸葛洋二)』

七月 『全学連第一七回大会流会』

八月 『社学同再建委員会、主要メンバー…中村光男、古賀泉、河野靖好、山崎修太、福地茂樹、星山保雄、中村佳昭、佐藤桑吉、機関紙『希望』発行。次いで『SECT No.6』発行』

十二月 『三派連合で全学連大会にのぞむ』

(〇八年一月)

本名||ペンネーム…生田浩二||加藤明男、大瀬振||鑄木潔、小野田猛史||武田秀郎||北川登、片山迪夫||佐久間元||須貝俊||曾木晴彦、倉石庸||井上実、小泉修吉||芳村三郎、古賀康正||坂田静朋||岡田行男、佐伯秀光||山口一理||宮本健一、島成郎||熊谷信雄、白井朗||山村克、鈴木啓一||森茂、陶山健一||岸本健一||清川豊、野矢テツオ||杉田信夫(信雄)、富岡倍雄||久慈二郎、星宮煥生||唐木恭二、加藤尚武||真樹朗、片山修||白岳徹

(『反戦学同関係資料・中村光男文書』国立国会図書館憲政資料室参照)

